

川柳雑誌

主幹・麻生路郎



第二
卷八
號二

二月例会

▼日時 二月五日午後六時半

▼場所 南區清水町電停西入北側端の坊

▼兼題「暴力」三句

▼會費 二十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。

柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌第八卷第二號目次

文苑

選句餘談
川柳眞田三代記を讀む

作家鮎美
春宵柳話

難解史句の解
關西中堅作家は語る

地氣の毒な病人の話
島めぐり

下マンドリン二重奏
リキシヤ逃避

鐵身分相應

一路集 (募集句)

雨鼠病
本社新春句會
支部の聲
續川柳家戸籍調
杭全町MEMO
編輯の窓

近作
川柳塔

竹盛内多聞
伊藤盛琴人陀

福田山雨樓
出口雨町

朝田新水
福田山雨樓

麻生路郎
光耀抄

武子壽枝女
不路子房子敏子茂もよ

近作柳樽

諸家

蛭子省路郎
松丘町二

三陽、雅幽、紫明
雲雀、光路

松野裸人
中盛琴人

片桐靈壺
山田巧笑

住田亂
山本巧笑

橋本綠雨選
酒井駒人選

長崎柳秀共選
長谷川一徹選

山雨樓記
伊藤綠之助

福田山雨樓
橋本綠雨生

路郎生

粒々集

前田五健

長崎柳秀

富士野鞍馬

桑原京路

杉谷專郎

木村晃秋

喜多春人

中野靈壺

片桐豆秋

須崎光秋

水平井雪峰

池田田村夢

住田亂路歌
岩崎柳二
關本雅幽
松丘町二
阿部閑生
西田紳助
伊藤藤之助
熊澤黃蟻
中岡濁水
藤岡櫻果
越中山公二
西村明珠
河野雙車
日野華路
中野見光
櫻井圓角
上野錦路
山本丹路
長谷川一
福田山雨樓
伊藤綠之助
橋本綠雨生
路郎生
麻生路郎
朝田新水
福田山雨樓
出口雨町
近作柳樽
諸家



吉例により

寫眞説明

(第一列向て)

右より(機見女、不路子、機見女、

坊、線、雨、喜、源、

公二、わ、吉、一、

(第二列同)櫻果

豆秋、卯三、櫻果

樂、山、櫻、香、

三、新、櫻、天、

町、武、柳、雨、

(第三列同)裸人

里十、九、沐、天、

椿、雨、天、

九、沐、天、

里十、九、沐、天、

椿、雨、天、

九、沐、天、

里十、九、沐、天、

椿、雨、天、

九、沐、天、

里十、九、沐、天、

椿、雨、天、

九、沐、天、

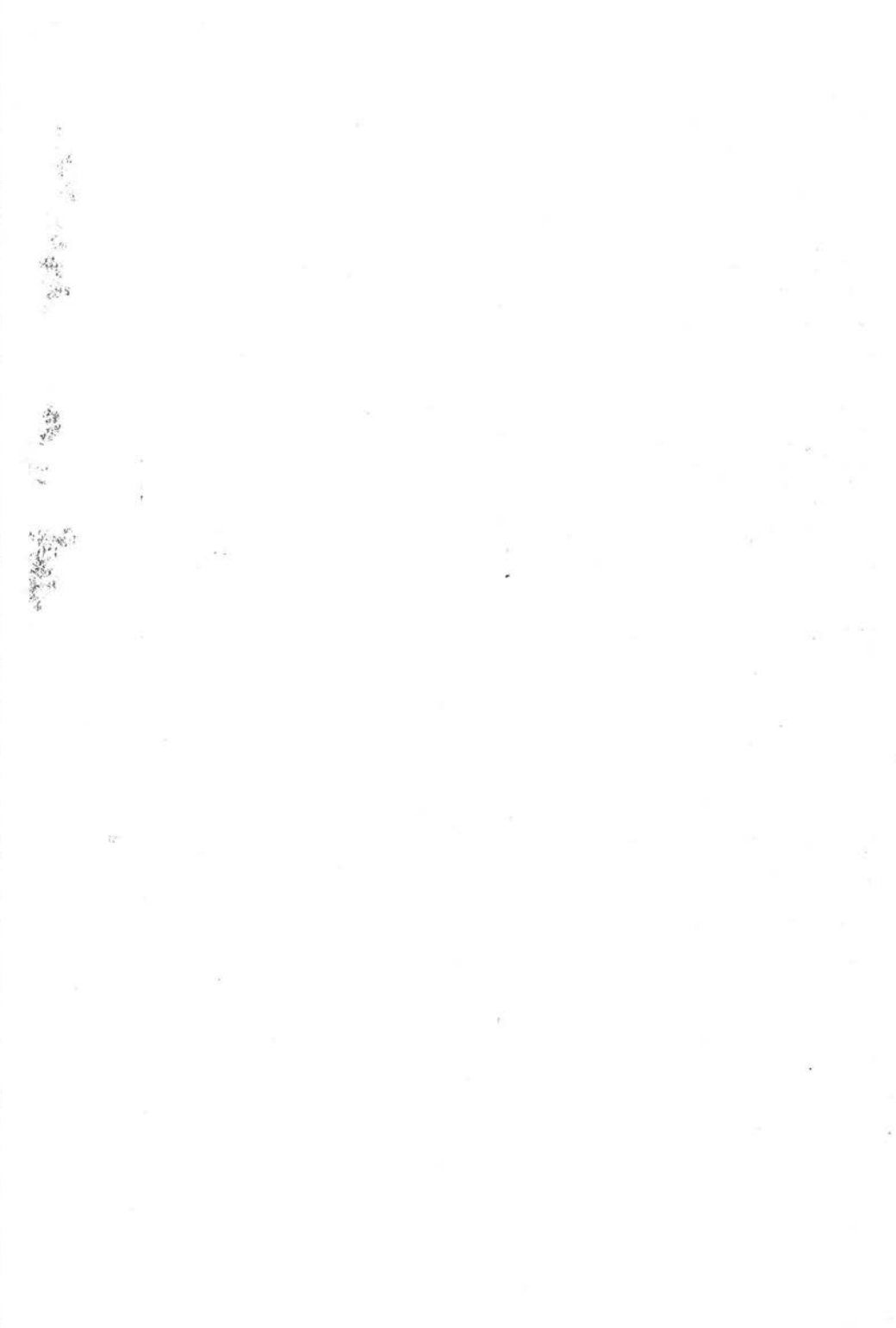
里十、九、沐、天、

椿、雨、天、

九、沐、天、

里十、九、沐、天、

椿、雨、天、



近作

整理 類々

麻生 路郎

ワイシャツの汗も悲しい
馘首だつた
くびきりにまがうかたなき父の御名
馘首になつて朝寝の味も知り給へ
馘首になる豫感もあつて風邪をひき
馘首が飛んで間もなく死んだ噂也





選句餘談

麻生路郎

没の句

そんなに苦しまずに作つた句であつても、作家の立場からは没にされることは決して愉快ではあるまい。況んや苦心の作が闇から闇へ葬られたとしたら、その句がさうして没になつたかといふ理由を聞きたい人々が多からうとは常々から考へてゐたところであるが、没の句を誌上に掲げて一々没にした理由を述べるゝなれば、幾ら頁数があつても足りないので止むを得ず何も云はずに棄てゝ來た。それでいゝのかも知れないが、それは私の氣がすまない。私に解らないから棄てたのではなくからうかと思はれるのも賴だし、作品の意味を取違へて棄てたことすれば何んとも申譯がないので、いつかは、没の句について筆を執つて、なるほご、そうぶ理由で没になつたのか首肯して貰ひたい。大正二年の夏頃から思ひつゞけてゐたのであるが、いゝんな理由から實行することが出来なかつた。その間十幾年の月日が流れてしまつたが、今度いよくそれに手をつけて見やうと思つた。尤も順序よく書かうなんて考へたりしてゐては果

てしかないで、頭にうかぶまゝをぶつつけに書いて行くことにした。幾分でも参考になる點があれば儲けものである。尤も没の句を組上にのほすことになるが、いさゝか死兒に鞭うつきらひがあるので、句主に對しては心苦しいけれども、一つの研究材料を提供してやつた位に考へていたゞきたい。

片假名の句

由來、『川柳雜誌』には片假名を挿入した句が多いこと云はれてゐる。これは私も認める。たしかに他の柳誌に比較して多數を占めてゐるやうに思ふ。それで中には片假名を入れた句さへ作れば抜けるやうに思つてゐられるのではなからうか。考へられるやうな作家もあつた。けれどもこれは大きな間違ひで、無闇に片假名を入れたからして句が巧く見えたり、新しくなつたりする。考へるのは早計過ぎる。曾て『句作上の諸問題』のころでも書いたやうに、同じ片假名でも極く一般化されてゐるものや、日本化されたものはいゝが、全然専門的な術語を片假名で表現して、第三者に難解句扱ひにされることは句主として

は大いに避けなければならぬことなのである。そのために句意が充分理解されなかつたり、又新しい語であるがために句主自らも、句の内容を充分生かすことが出来なかつたミすれば勞して功の渺いこととなつてしまふ。従つて没の憂き目を見なければならぬ可能性が九十パーセントはあるものミ覺悟しなければならぬ。尤もこゝで云ふ片假名ミぶのは、ニコくだのムツミしてだのミ云ふ日本語の場合でないことは斷るまでもなからう。

剽窃と暗合の句

剽窃の句が没になるのは當然すぎるこゝである。他人の射つた鳥を提て行つて自分が射ちめめたやうに見せやうミ云うのであるから、てんでお話にならない。尤もそんな作家は専門誌にはゐない。ゐたところですぐに觀破されてしまうからであるけれども暗合はある。句主が知らずして、一字一駒も違はない句が一時に五位果まるこがある。句主が遠隔の地に住んでゐるミすれば、全く暗合の句ミ見るより仕方があるまい。この場合非常にすぐれた句であれば先着の句を一人生かすのも方法だが暗合するやうな句に、そうすぐれた句はない。大てい凡作である。だから剽窃でなくとも暗合でも没になつてしまふ。すぐれた作家よりも初心者の方に暗合の句が多い。古句や先輩の句を多く知つてゐない證據である。

類想の句

一字一駒も違はないのは暗合であるが、叙法の上で一字、二

字違ひや、内容が殆んど同じである場合には、これを類句ミ稱んで矢張り没にする。しかし、字違ひでも、内容がすつかり違つてゐるために句を兩正させる場合もあるので、類句ミ云うのは主として内容の類似してゐる場合であるミ思へばいいだらう。しかし内容の類似ミ云ふ點になるミ、なか／＼識別が困難で、甲の選者で類句でないミ思つて探つても、乙の選者は類句だミして棄てぬミも限らないのである。だから古句や先輩の句を多く讀んでゐない選者が選んだ句には類句ミころか暗合句ミへ選んでゐる場合がある。曾て某君が一茶の句を抜いて天に据えたため、それが俳句であるにしてもあんな有名な句を抜くやうでは困るミ云つて非難され驚いて一茶句集や蕪村句集なごをのぞき出したこゝがあつた。選者は決して神様ではないから、そんなこゝが一度や二度あつたところで非難するにはあたらないかも知れないが、假令俳句であらうが名高い句位はのぞいて置かねば、さんだミころで鼎の輕重をミはれないミも限らないのである。

假令類句であつても遙に古句や、先輩の句よりもすぐれてゐる場合には後者の句を生かして差支ないのであるから、類句であるこゝを知つても、充分その點に自信があれば選者の手許に送つて、可否を一任するものいゝだらうミ思ふ。そして没になつたミすれば、古句や先輩の句ミ同價恒の句であるか、それ以下で下であるから難句ミして没にされたものミ思へばいいのである。(つゞく)



川柳塔

竹内多聞

○ 諦めてゐるつめたさへ追付かず
 ギラ／＼の顔で儲けた話なり
 牧師また棺へ向つた聲になり
 親切の揉み掌にこほれるばかりなり
 満足は兎のやうに飛んで去に

○ 朝田新水

消費税知らずに子供伸びて行く
 割箸へ膝をくづさぬ一週忌
 分別のある夫へミ二度の縁
 雑音に生きるダンサーならすして

使はれる身には日記の裏表
 今の世に起請文ミは馬鹿けて居
 御用のない方は通れの松飾
 盗人をして望みはないのなり

○ 松盛琴人

初旅雑観 (三首)

鷹揚にすればはたごやへいへいへい
 あすこらかこゝらかこ間の山をすぎ

○ 微古館にて

瞳に映る神代繪巻の如く也
 御幸道自働車豆のやうに飛び

○ 内宮にて (二首)

足が地につくここの神の御氣配
 宮警守川島武夫さいふすがた

○ 鳥羽にて (三首)

鮑取りを寒く見て過ぐ鳥巡り
 落し物さがす姿で海鼠突き

○ 福田山雨樓

枯草のさゝやき脊を追ふてくる
 添乳する髭贅澤は言ふこれす

雲よ散れちれうちも隣も赤ン坊
風邪一つひかぬここからもう惚け
ウエートレス足袋を踏まれてまたさみし
ぬかるみを深ゴムで行く逢ひにゆく
うすきむつきの棹棹眞冬
子も妻もしばし雜煮へ黙したり
寒い日は高利貸ほご首へ巻き

伊藤愚陀

ビウタイパラから尖つた鼻で出る
描いた眉へ冬の雨さむぐミ
風騒しく障子の影は自分也
出 口 雨 町

ステツキを好きな女給にもぎ取られ
耶蘇よりも酒に救はれようとする
使はれた揚句がテキヤカツになり
煙まで穏やかならぬ昇りやう

再び小曾根村に歸りて (四句)

大朝をくさし乍らも讀みつゞけ
容れられぬ思想をまもり餅をやく
母ミ居て革命の夢戀の夢

當分は羊に化けてみたろかい

正月 (三句)

松の内飯櫃までが汚なすぎ
搾られてゐる階級も目出度がり

住田亂耽

Xマス少女は病みて眼のうるみ
コンクリートの教育を流しこみ
凡人ミのつきあひもむつかしき
ライターの焰に似たる街の戀

中島鐵洲

別借の高をきゝつゝ猪口を受け
やうく姉妓の苦勞がわかりかけ
二十年妻の素顔も尊くて

岩崎柳路

ライターを女給に取られそれつ切り
大戦後の獨逸がなごこちミ氣取り
白蓮へ折れ釘流の賀狀も來
はつきりミ驢馬の鼻息零度以下

長谷川一徹

つかみずし下戸肩狭くすみに居る

神農の御像仰けばわれ若し
讀みもせぬ新聞に居るお正月
巧利的な彼氏さも會ふお正月
ガソリンが鼻をついても堺筋

○ 關本雅幽

終點の灯にはつきりゝ飢えて居る
淋しさは癒えずチツプを投げてやり
飲みに來てくれぬゝ怒つて居るそうな
腹空かぬ日だ屋根ばかり見ゆ

○ 安西杏三

ラヂオ獨りはしやいで師走
轉落の加速度を知る年の暮
女教師のコケット黒い手袋に
夫れゝの家風に暮るゝお正月

○ 松丘町二

踏み潰された蓐の姿だ己が靴
ゴミ箱をあさる王者のこゝろかや
粥を煮る草にこゝ缺かず春は佳き
生れながらのルンペンに何の初日ぞ

○ 橋本綠雨

凍てがまださけず靴跡二つ三つ

二人して日の短きを語り合ひ
晝もなく夜もなく吾は働かん
素焼の壺に春をまつらし
すわつたり立つたり秋はつめたし
金光教金にありつける様な氣が
地下鐵の工事に小判みつからず

◇ 阿部閑生

外出へまだつかゝゝ往診し
方針を變へたさいふに取りあはず
貰ひ子を舐めて育てる女あり
法話聴くおやま坐りの女あり

◇ 三好計加

お父さんも一緒にうたひ小春のく
色がいゝゝ壺を二三度なでゝある
軒下の吊した柿を見て通り
博士らしい顔はしてるゝ友の口
うまゝゝおたべゝ小石くれる兒
富士山の下は海かゝ繪本見せ
鶴嘴の並んでおちるのを見ゝり
百姓が來たので燐寸かつてのみ

小徑ゆくてに肥たごがやつて来て

◇ 西田 艸 樂

人間よ海水着が要りスキーが要り
出支度が門へ出てまでまだ待たす

◇ 川村 觀 月

死ぬのなら臟腑つかんで死んでくよ

枝柿のはかなき命こも知らず
練炭の共同一致せる姿

◇ 伊藤 綠 之 助

元日を病む(二句)

元日を病むこは豫定になかつた
母ばかり使ひ過ぎたりお元日

◇ 上村 村 樂

工場整理

今日も又狭き日本へなけだされ
飯食ふたゞけが重たい一人者
あつさりこした持前の金に盡き

◇ 熊本 黄 峨

我が家のように別荘番暮し
いこはんも精神的に處女を失ふ
お互にたぎんの如き人生よ

糸の氣もなく白粉垢をみせて酌ぐ

◇ 生田 翠 夢

豊川稻荷にて

繁昌を求める群の列に居る
祈禱料出して財布の中を見る
女から來た賀狀あり初日の出

◇ 中澤 濁 水

號外へ我手で見たい顔が寄り
氣に向いて娘干竿塞け切り
本邸は放つて妾さ遠く棲み
伴れ出しに行つて飲むのを待ちあぐみ
飲みに行く外は斷る日がつかへ

◇ 池田 雪 峰

大晦日山の松葉が羨まし
正月に退職金が何んになる
金縁の近眼鏡をかけた嫁
砂針のやうに働く口がない

◇ 藤岡 櫻 果

座るにも起つにも父のやれこらしよ
女風呂主人は煮やすきません
買ふよりも高ふ國から大根が來

挿鉢をころがる錢も春なれや
留守番の角力襖へ穴をあけ
膳を出すつもり母へ灰を撒き
集金に來たのへ米の味を責め
もう一つ泊めねばきかぬ荷をかくし
もうきこらまで去んでる時計を見
失業の中に前主を忘れかね

寫

眞 (三句)

子供等はマグネシウムにきよこんごる
取りかへて抱いても似合ふいこにて
餅花の下にならんで初うつし
一通り怒つて家主語をゆるめ

◇

平井 蒼 太

のつみ出た太陽の色のご燃えんかな
みんな皆顔の女の松の内
尖端をゆくやすろうすの垢じめる
夢をくふ男になりし三十二
おつ母あが待つてらあこいふ兒の肩よ
三ヶ日妻をいぢめて暮らしたぞ
友愛のさようならした月曜日

いぢめてよいぢめてよてふ妓なりしが

◇

丸山 公二

道理を楯に膝をすゝめる
薄情のかづく炭をつぎながら

◇

水田 光 穂

安いのでよろしおまつさ十二月
焼き物の鯛にも似たる花嫁よ

◇

越 中 今 雨

蜜柑喰べく紀の國屋文左衛門
女の子買ふて貰へるのに動き
十八九足袋の破れをかうかくし
桃割が脩いて來る春の街

◇

須 崎 豆 秋

うまいこみ斬つて新國劇の春
阿呆なこ言ふてしもうて淋しけれ
つゞまりはこいつも金かさア寝よう

◇

西 村 明 珠

食ふ足しにする鶏がすゝけてる
背の子を無理に笑はす人に會ひ
信用をさせ様こする熱心さ

俄雨玩具も買はず歸つて來
錢別にいやな名前も見うけられ

◇ 片桐 靈 壺

親一人子一人松の内さびし
寒月へワンタンメンの息を吐く
水を飲むべしく瘦せてゐる
すき焼にお酒がなくて何んですの
そもくが貴方は嫌ひだつたので

◇ 河野 双 車

首をさすつて正月はすむ
奪ふ迄男おかしや跪まづき
錢で神をあざむく氣なりけん
妻の顔子の が深く辨當箱

◇ 中野 裸 人

コッポリがはつきり止る交又點
二人共マスクをかけていやがられ
大阪を有難がつて栗をやき
光榮に浴し女給の襟をそり
戀人を尋ねる途の神詣で
日野 華 水

初登山靜かな靜かな流れなり
ねむたさをこらへて遊ぶ三ケ日
日めくりのわりに廣告大きすぎ
飲まなけりや正月氣分が出るかいな

◇ 喜 多 春 秋

目に立たぬ柄を麗人仕立てさせ
同情をしたゞけそれを騒がれる
オイくゝを女を呼んでウイスキー
死ぬものを助けるほきの醫者でなし

◇ 中 見 光 路

明日のある身にお淨土の尙遠し
追ひ越した醫者の車の灯に寒し
年酒なく國家に暮る家を辭し
榮つ葉服もつゝ反身になり給へ
娑婆の節ついて和讃に氣がのらず

◇ 木 村 晃 卓

斯く言へばそれも病氣のせい云ふ
思ひきや易の表は上上吉
廻れ右して世を見ればうらゝかさ
今死んではならぬ仕事がつたある

讀んで字の如くにあれや極樂よ

路 耶 先 生 へ

句をいだし締めて師恩にしたり居る

◇ 櫻 井 圓 角

神詣で大和平野の雲の海

廻禮へ木瓜酒ころり野趣を飲み

◇ 杉 谷 專 路

だまされてやれば女給の厚化粧
年の瀬を岡辰帳で押し切らう

地震の流言しきり (三句)

金の下敷になれなれブルの奴等よ
寝そべつて逃ける道なご考へる

◇ 上 野 錦 水

頼られる男にいつかなつてゐた
精神的に大きな借があるのです
氣質だこいふので皆んな負けてやり
忠實に働らいてゐる精米機
板圍ひモーターの音水の音
心配は誰でもあるこ酔ふて居る

◇ 桑 原 京 郎

こゝろの鎧着るは淋しき
嘲罵してゐるに人氣の数のうち
バット級レイヨン級はまだ娛し
嫂の涙が走りもこで落ち

◇ 山 本 丹 路

情熱は書棚の隅に置いて來た
ドラ猫よつまりお前の勝なんだ
肥えなさい資本家云ふ看板に
履歴書の一行こなる卒業よ

社友の句で面白いのを抜く。

閑生の「外出へまだつかと／＼往診し」は誰でも作れそうだが
容易に捉え難い句だ。流行らない醫者の肺臓を点ぐつてあます
ところがない。計加は凡作ばかり寄越す時があるかと思へば、
比較的多くの佳作を寄せることのある作である。彼は句を作
らないで生む、それも畫を描くやうな詩人の心で生む。「鵲嘴
が並んでおちるのを見とり」「百姓が來たので つかつてのみ」
「小徑ゆくてに肥たこがやつて來て」の如く至極のんびりと
した句風である。うれしい作家の一人だ。觀月の句は、近來め
き／＼とすゝんで來た。觀察が鋭くなつて來た。「煉炭の共同
一致せる姿」の如きはその最もよき例である。その外、濁水の
「號外へ我手で見たい顔が寄り」櫻果の「座るにも起つにも父の
やれこらしよ」蒼太の「三ヶ日妻をいぢめて暮らしたぞ」等々
々いづれも面白い。まだあるが餘白がない。(路耶)



柳川眞田三代記を讀む

蛭 子 省 二

牛鳥の肉を嗜まなくなつたのは、老境にいつたからであらう。さるにても此地山を圍らす、香屋の運ぶもの、いかに腐つても鯛さはいへ、目玉の色をあせたのは膳に上らぬ。遂に刺身をあやぶみ、専ら野菜を欲するにいたる。私の母は一生が精進であつた。然るに鯉の稀にみる、勇ひづいたものを貰ふ。鯉は川柳の材となる、それを語りつゝ美するのもよし、飯島花月翁の新著『川柳眞田三代記』(ポケット型九十五頁、宣眞版澤山四十五錢)が配達された。川柳詩徒の得的歡喜、これに過ぐるものがあらうか。

今は昔、翁に同じ名の著述あるを耳に

し、古書目録にでも見出しなば、直に求めむ三年來留意するも能はず。柳友二三の書架にもないので、熱望の度は昂められるのみであつた。此事卯木氏に告げしかども記憶すれき、さういふ経緯であつたか借覽し得なかつた。關東大震災の翌年(一)かに『花月さんが神田の〇〇銀行にきて居られるが、訪問されては如何』と、卯木氏から勧められたけれど、時節御事業方面の御多忙を恐察して、遠慮してしまひ爲めに好機を逸して、今日迄も親しく膝を交ゆるの幸運がめぐりこない。

翁は銀行の頭取である、と申すよりは

明治文壇の先輩者にして、敢て江戸文學ミ言はず、文藝全般に洒通せられ、多少しも明治時代研究をするの徒は、翁の文名を隨所に發しするであらう。爾來我が文藝界が翁に負ふ處に莫大なるもの、強記聞學なる想像を許さぬものがある。而して川柳は多幸にも、新川柳復興當初より深甚懇切なる指導をうけ、現川柳大系を形成するまでになつた、大恩惠は、到底私共は忘れる事は出来ない。

私は今度の『川柳眞田三代記』の豫約廣告をみた時、飛立つ満足で發行所に申込をなす一方、翁へ御努力感謝の意を表するこゝ、

川柳眞田三代記に付御懇書拜承、品切れの處今般句數倍増、誤を訂し再刊に附すべく研究誌にて大に骨折くれ遠からず出市すべく存候、相變らず杜撰の點多々可有之候御是正願上候。このお端書を頂いた。これに因つても舊書は頗る部敷の少かつたものらしく、愛書趣味からすれば珍本として、探出さねばならぬもの、今新刊を手にする私は、一層第一版の姿にでも、めぐり逢ふ日を樂しみとする。

序文に『眞田氏遺民の裔孫』とあるを以てしても、多年此の書のために捧けられた御辛勞は敬服に餘りあるべく、凡そ關係古句は悉皆網羅して剩す處なく、私は手元に書留置いた若干句をも對照してみた。恐らく、これ以上の集大成はなからうと信ずる、其の説明の妙趣妙文は、眞相の堂奥をきはめ、案を叩いて快哉を叫ばずには居れぬ。其一つを抜いてみる。○幸村いッと居る××をなされ (末摘花二) ○眞田父子ばか、××でなし (柳 笈初)

幸に高野坊主の慰み物に成らざりし之意の間の。英雄昌幸、幸村も、川柳子には時に因りて斯く安く扱はれたり。但し幸村の大阪入城は四十八歳にして昌幸はそれより三年前、六十五歳にて歿したれば、孰れも頑童に見立つるは適切ならずなごは、川柳に無用の穿鑿だてなるべし。且高野六十、那智八十の謬もありて、『大子集』の附合には『六十になれご心は若やぎて、附高野も今は戀の最中』とまで謂へるをや。

定に解釋が散文詩であつて、古句が詩に遠い事を肯かしめる。古川柳家には、市井人多かつた。市井人といへども、史眼を有するの徒がないとは云へぬ。否人間味豊かに、専門史家の意見の表面觀察に透徹する、特種の川柳第六感が働いて、寧ろ此方に尊い正しい貢献をなすあるを見逃してはならぬ。恐らく今後の歴史研究の道程に横はる、

興趣ある材料たるものが存するを疑はない。

○錢づかひ上手にしたは安房守 (樽三五)

此役に於ける眞田父女の舉動は、史家の疑問とする所なるを、川柳子は最も簡明率直に斷定して、父子兄弟馴れ合ひの謀略に出でたるものとす。稚氣な愛す可きに似たり、然るに近年發見せる古文書の研究に依りて、此事實ありしこと明確となり、川柳子をして先見の名を成さしむるに至り。

○翁の極印附證據があがつた。翁には『上田城と眞田父子』の正史傳研究者述もあらせらるゝそうだ。

掲載句の出所は、柳樽の篇を重ねた部に多いので、所謂狂句が少くないのは止むを得ぬ。

○六錢を分け一文をたやさぬ氣 (樽五三)

『二家一門の一門を、一文に謂ひ懸けたるに過ぎず』で、兄信之は徳川勢に、弟幸村は大阪勢に加擔したのをいふの

であるが、『六錢を分けて半分たやさぬ氣』と素直には詠まぬ。尤も『半分はのこす智略の十二文』なる作はある。これを要するに此書からは眞田三代に亘る、史傳俗説を學べは足る。例言に『抄句中往々甚しき劣作惡作あり。選句を主とせしに非ざるを以て、玉石同架の觀あるは素より期する所なり』とあるが如し。

古狂句中の難句解の容易ならざるを更に教へられ、青年川柳家が見聞知識を輕んずるの愚かなるを痛思せしめられる俳諧ケイなぎに一寸齒のたないのも夫れで衆智を蒐める研究上の相互扶助精神が湧かねば、川柳壇は大をなさぬ。自己の短見を誇信して、他を冷罵するはやめたい。大阪くじの句が六つ掲げられ

○大阪くじの満會は錢ばかり

大阪圖の句には「柳樽一八二編に『かねをかけたので大阪くじになり』なぎ頗る技巧的の作あり……錢ばかりは幸村が翌年落城の最後まで奮闘したるを

無盡講の終局（満會）に擬して謂へるならん……大阪圖は頼母子無盡講の毎會の鰯金受取者を定むる爲めに行ふ抽籤方法の一種なり。立川馬場の書きたる戯文中に『大阪圖の無盡には、一本残りゝをあたりとする』云々あり。或は云ふ最後に残りたる籤の番號の、一段上位の番號を當り籤とする方法にて、例へば殘籤が十五番なる時は、其兄籤即ち十六番を抽きたる人を當籤とするが如し。江戸式にては、弟籤を當りとし、右の場合に十四番を持てる人を當籤者と定む。今日は大阪式を通例とし、兄籤が當りなること異しむ者無きを以て、

大阪圖の種は自然滅びたりと。

等・大阪居住の川柳家には、殊に興味深き記事であらう。

○煙草出る沼田に烟い安房のかみ（天保）此句を家族にみせた處沼田煙草の事を知らない。狂歌煙草存首に沼田産は、『葉大にして色青く口中味賤して臭、唯火を点て滅す、夜中吸ぎも口舌を損ぜざるを

奇す、總國の人なべてこれを好めりとある。

上田方面は眞田三代關係の外に、實踏すべき要のある川柳資料が多い。私は學友もあり、一度は著者の書齋にタイムを費さして頂く、最善最勝の因縁あるを信ずる。此書普及版の體裁にて、世に提供された御厚意を讃仰したい。

（十二月二十一日第一讀直後の稿）

附記

東大の黒板博士が大阪城實踏をせられ、本丸の紀州御殿、天守閣、お金藏、金水銀水、淀君秀頼等の自及した山里丸、二の丸では石造りの煙囪庫、八角庵、追手門、三の丸つづいて眞田丸を見られた後に、

全く感服した實によくあれだけ残つたものだがこの天下の名城の史跡指定が今までおくれであつたを甚だ遺憾に思つた、ついで外廓特に偕行社附近が江戸時代の俤を失つてゐるに殘念だが中の丸、本丸は殆ど舊狀を残してゐるあの壯大な城壁はさすが豊公の雄渾な性格を語るもので慶長、元和の豊臣家の最期があり、と偲はれる氣持がする城壁の外にも當然保存すべき貴重な史跡があるから指定したいと思つてゐる大阪のやうに新しい大きな建物がドンドンふえて古い建物の少いところではより一層この名城を大切にしなければなるまい、眞田丸も眞田幸村の史跡として面白ところだから成るべく指定したいと思つてゐる（大毎紙）



近作杯

路 郎

選

不景氣をよそに濡手で待つてゐる
 なにもかも謝絶づくめの大構へ
 親の氣も知らずに戀の目無鳥
 をさな子の眠る姿へ浮世の灯
 蹴をにぎつて長い孝行
 御長命秋のひがんにおはします
 淋しくなるよ金の親切
 心得て候ミ云ふ返事なり
 考へておくミは娘大膽な
 母娘して運ぶ家財の中の琴
 鈴振れご神の笑顔も近よらず
 肺病は惡運ミして紡がうよ
 プラトニツクラヴにみぢめな空の色
 紹の羽織ほのかに色の町をかぐ
 うわまへをはねて彼女に貢ぎ足し
 手を握つたで格氣おさまつた
 タがすみ誰か向ふで呼んでゐる

大	同	同	同	大	同	同	同	廣	同	同	同	大
阪				阪				島				阪
夕	同	同	同	同	同	同	同	露	同	同	同	沐
鐘			ら	同	同	同	日	斗				天
			つ	同	同	同	城					
			ば									



氣の毒な病人の話(二)

A 中 野 裸 人

溫味に變化のない電氣炬燵はよかつた。俺は頭から夜具をすつぽりかむつて眠つた真似をしてやつた。

枕元には赤い枕と數鳥の空箱と活動のニユースが散ばつて居た。やがてみし〜と聲をふむ音が聞えた。小さい俺はとび上つて喜んだ。それはまがいもなく夏江なのだ。俺は夜具の中でぐうぐういびきをかいてやつた。

「早く起きないともう拾時ですよ、あたしなんかもうお湯へ行つて來たよ」

そう云つて夏江は大きな体軀を鏡臺の前へどつかと置いた。俺は首を出して見た。

面憎い程大きな桃割れ、癪にさわる様な長い眉、鼻を壓迫するまでに張り切つた兩頬、紅のめつた尖つた唇。俺は殺してやりたい様な氣がした。



觀光團働く朝の町を抜け
迷信をさけて醫學の手にかり
よつてたかつて不景氣にしまひ
本當を言ふに氣狂ひださいはれ
湯豆腐へひよい短氣な箸捌き
獨り寝の夜具冷えてる寢白粉
魚屋が二軒市場のやかましき
今のんはバツトを折つたらしい音
賣られゆくお前の顔ははれてるぞ
豊橋豊橋云ふ迄泣いて行け
たゞ風がふきくるばかり慈善鍋
十二月障子に小さい穴があり
夕刊屋マスキの聲に聞き直し
大晦日泣いた所で金は出す
菓子折の無駄でなかつた課長の眼
十五錢道頓堀のカツレツよ
明晰な頭腦をもつて指揮を受け
欺されてみずに四十になりけり
母に逆らつて淋しき丸る寢なる
寢入りたる母の吐息に箸を置く
俺の氣も知らず錦紗を縫ひつけ
安ければ安いで鯛ねぎられる

同	姫	同	同	同	同	同	大	同	東	同	明	同	島	同	大	同	金	同	明	同	大
	島						阪		京		石		根		阪		澤		石		阪
同	二	同	海	同	同	同	さ	同	氷	同	了	同	紫	同	碧	同	木	同	啞	同	丸
	竹		洋				だ		村		念		光		水		偶		聲		葉
			人		生		を										人				

靴の音とサアベルの音が起つた。
にせ者は飛び上つた。併しもう彼は逃げる同
もなかつた。そこには大きな本物が立つて居
た。(六、一、五)

島めぐり

松盛琴人

伊勢参りの序に鳥羽一足を伸ばし島を
試みた。案内者は船頭言葉はゴツ／＼して
が正直らしい。彼所に見えるのが蛤岩其左り
が鮑岩です、お客さん御存じの名物伊勢海老
はあの鳥影で皆取れるんです。伊勢海老は網
でも釣るのでもありません大きな／＼岩の
下にすくんで居る奴を潜ぐつて行つて手
ひつ掴んで来るのですと親切に説明して
くれる。それが伊勢談の機で如信を持つて語
る時船は岬をぐるりと廻る、其處に展開され
た大小の島々は繪の様に美くしいとみると
鮑取りの海女が二人ザンアとばかり海へ飛
込んだ。案内役の船頭は早速に海女はあし
て十五分二十分間も海に潜ぐつて居ります
五分や三分ではお客さんが承知してくれま
せん。さうして鮑を取つてお目にかけるので
す。夏は湯もじ一枚で海に飛び込みます、青
い水の中へ真白な肉体美が透いて見へます
と妙に言葉へ情味を持たせてくる。それがマ
ザとでない説明者の實感らしい處にユーモ
ア味が横溢してゐる。こちらの島が親子島と申



村芝居子供見えない口を開け
薬積んで行く母の聲姉の聲
氣が浮けば世間の廣し美しし
本當の戀だつたのか日記帳
老夫婦食はず飲まずでためてゐる
間違ひを判つた損へ高笑ひ
白足袋をはいて金がないのなり
出開帳死金を取る有難さ
紅濃く墮ちよ墮ちよ唄ふなり
エンゼンの中に青春すぎんさ
一枚の銀貨へのせた命なり
看護婦の左りぎつちよにフト氣付き
外交員なきがよからうと取合す
職工の眼に今日の金庫の重く見え
冷淡に言つてのけたがあれは手だ
雨の朝を汽車に運び出された欠伸
祝い事親類の顔良く揃ひ

大聖寺の地震

瀬戸物屋破れ残りだけ先づ飾り
詰襟で行けば詰襟だけに見る

長野	大坂	鳥取	石川	大坂	同	同	金澤	大坂	同	同	名古屋	鳥取	大坂	京都	大坂	越中	大阪
蛙鼓	ト居	湖山	山々	吐句坊	樹光	葉光	白雨	柿次	周波	菊路	草石	源太夫	洋々	鐵漿	桃太郎	若子	絲

てゐる株式會社×タクシー(株主實に十有六人資本金一萬三千圓といふからして、如何にすさまじき自動車屋である事が判らう!)の体よき電話交換手を、營業主任といふ有難い名の下に、凡々とつとめ上げてゐる私を發見した。私は何んといふみじめな私になつた事であらうとしみじみ情けなくなるのであるが、さてサラリー(といふ程でもないのだが)を貰ふ時は、萬更悪い氣も起らずすまめ(伏十年と毎日々々モダイン雲助達に混つて單調な生活形式の中に全く自己を没入してしまつてゐるのである。全く私は今退屈しきつてゐる。疲れきつてゐるのだ。)

電話のベルが始終頭の中で鳴りひびき、目に見えぬお辭儀をするにも充分の飽和を感じた。

平凡な追憶ながら、萬よして與太つてゐた時分の私、雀クラブで滿歡の夢をむきぼつてゐた頃の私をいとも心強く、たのしいものと思ひ出しては、網膜は街の姿を映して見たく思ふのであるが、晝はつとめの爲に殆んど皆無といつて、位、街の感覺を味ふ事を許されない。近頃たま／＼お目にかゝり得るのは夜の都會のプロファイルのみだ。然しながら、あく／＼いネオンサインの媚笑、タクシーの殺人的スピード、ジヤズの饒舌、E.T.C.等々に神經をすりへらす外、何の得る所もなく悄然と郊外電車の固いカツシヨンに身を



旅行より歸りて

もう歩きさうだ。靴も買うて來たあきの夜の斐翠の夢にさも似たる一つ替五錢の柿がなつてゐる智慧かして亭主の負ける家計論雲を突く氣に成りさうな避雷針省電の美人へ席が二つ空きまさか貫一にも成れず新世帯鏡の前に二人立ち抵當の家を長男繼がされる唸る程ある所には有るさうな寒空にさてく書本なき竝べ度し難いもの恐ろしく念佛やもう死ねよおまへの戀もこれつきりみかんむく手に冬の感覺叱る人もゐない柱の黒光りなほつきぬ名残りへ星の座がかはり行水は近所の噂聞き流し箱一つふえて奉公の年が暮れ近道を來りや改築のほこり風

神戸	大阪	同	同	同	東京	大阪	同	大阪	同	同	同	同	愛知	大阪	石川	同	東京	名古屋
竹風	笑四	繁坊	水煙	木馬	救命	山茶花	規土	北人	泉流	童史	有陀	みつる	巧笑	神草	吉祥	溪鱈	音吉	きよし

よせて歸つてゆく私をいつも見出すだけに終るのが常である。——此頃の都會はびらんとした局部、局部をかくさう爲にますく厚化粧を施してゐる。之にはインテリド、ダアとならざるを得ない。

夜の大坂を歩いて、鋭く感じるのは街の皮膚全体で不景氣の深刻さを呼吸してゐるあの灰色のいきさびだ。まことに深夜の都會人は物凄ゐ表情をしてゐる。私は何時も之にへきえきして、惶惶とこの魔都にアデューを告げるのである。

OSAKAから歸る時、私の町の停留場を降りるのは、大抵午前二時頃で、そこから人力車轎場を叩き起して家まで送つて貰ふのである。星のある夜等あの古ぼけた幌のセルロイドから見える、ソフトフォーカスの空はまことに快いもので、微風のある夜、ばさばさといふと幌がなるのも嬉しい限りである。

軒に青い燐火を點じて、全く死んでしまつた町の角々を曲つて家へつくまで、折々風にカタカタと身をふるはして、齒の抜けた様な笑ひをする店先の看板を無氣味に思ひながら、俤夫と色々話をする間は五分もないのだが、この短い時間を私はいつもジョイフルに感じるのである。

この人力車はいはゞ、私のつとめてゐるタクシーとは商賣仇敵で、以前タクシーが門で待つてゐる人力車の棍棒を折つたとかで、尻を持込んで來た事があつたさうだ。

自動車ばかり動かして、客に頭を下げるのにその日その日を送つてゐる運轉手の一人



作家鮎美

松 丘 町 二

作家鮎美は歌ふ。

水すまし僕のこゝろへ舞うてゐる
 いちく味の味に寂しき父と子と
 壁を忘れたあはたしき生活
 亡き友の名を掌に書き
 灯を消せば秋は流れて仕舞ふなり
 蕎麥の花をみてゐてさびしくなりぬ
 にんげんのお伽噺の桃太郎
 成佛に行儀正しく二女三女
 黒眼鏡朝の氣持のものでなし
 誰も來ず木の芽立つ庭見てゐたり
 晝の蚊が來てひとりなることさびし
 さまぐの姿のなかにうつむけり
 次の日はいつそ小さく日を暮し
 いっしんに戀を守つて湯ざめする
 夢一夜草苗吹いてゐたりけり
 古來如何なる眞實も喇叭を吹いて語られた例はない。然も眞
 實を語るいふことが如何に至難な事であり、又如何に作家とし
 して人間として至高に價するこゝであるか。鮎美君の作品に對

するとき、只管に我々の心を衝つものは、實に作者の語るひた
 むきの眞實であるのだ。私は鮎美君は新鮮潑刺たる心を持つ
 て、個性的な新しい表現を吾ものこしてゐる作家を知らない。

つけ豆の一粒づゝに浮き沈み
 梅干のたれがちらばる醫者の庭
 雲水の湯呑みにこもる人の呼吸
 戸槌の雀親も子ごも口あいて
 凡そ作家の問題はその眼が澄んでゐるか濁つてゐるかの一
 にかゝつてゐる。鮎美君の眼がこんな小さい埃をも許さないデ
 リケートなものであるこゝを如實に示してゐるではないか。更
 に見よ。

蒼白き顔して犬と戯れよ
 日も暮れてひとりで路上の魂かな
 剃刀をあわす尼僧の心かな
 自制するからだの骨がぼきと鳴る
 噛みきれぬものに乞食の齒を見せる
 足あとの凹みに蟻は重傷だ

お嬢さん眼光ではこゝまでは見徹せないのだ。こゝに二人の作家の眼が同じコップを眺めたこする。コップに觸れる無限の光線の戯れの中、甲の眼球の網膜がこらへる光線の分量が、乙の捉へるその幾倍かであるこいふこ、言ひかへるならこは遙かに甲より貧弱な同一のコップを眺めてゐるこいふこは有り得ないこいだらうか。私はこれらの句に鮎美君の眼珠の卓越さをおいみじくも探り當てた氣がする。

寂光のするごとく笑ふ佛さま
寂光のけだものとみて犬はゆる
寂光の笑へば咳が重りて
寂光のろくろを見つけないか
これらの佳句は、佳句ではあるが作者の非凡な才智を物語るに止まるやうだ。

さう金におびやかされてもゐられない
金の利息の冷たき夜をかこつなり
まごろすばいぶをくわへて金を笑へり
何をうたふや紙幣束の上の繩
金錢に對してかう歌ふ作者は、有産無産の階級へ如何なる批評の眼を向けてゐるのだらうか。

陽のなかにプロレタリアの爪の垢
プロレタリア首をふるのに雇はれる
朝の呼吸ぶれたりあの腕時計
春の朝巡査部長に成りあがり
まがりたる鼻のあるじはアルジョアよ
嗤ふばかりの反逆兒にもあらず
上役へ鈍な眼で見えて笑はせる

諸君は云はう。生ぬるい、こ。私はその批難を否定はしまいが十七音字ほつかりの型體で、諸君は一體何を暴露し何を糾弾し如何なるイデオロギーを示さうと云ふのか。屢まこに屢見かける例の咲叫式川柳なら、何も諸君に詩人の筆を必要とするまでもなく、女工や女給諸君の叫びの方が遙かに鋭いものがあるのだ。川柳が川柳であるためには飽くまで詩でなければならぬ。詩であるためには、諸君はもう一度これらの句を吟解のために繰返さなければならぬ。

片戀かしらんと空をながめぬる
片頬にばかり接吻されてゐる
さびしくも父は枕をおちてゐる
落椿からだもらくになりたれば
をかしさは五十の阪の子が戻り
渴仰の物を云はない顔になり
晝ひなかげつに胡爪浮いてゐる
秋の田の日和に腕が抜けさうな
胸ぐみの再び戻るよき心

この素朴な健康な重厚さの無類さはさうだ。作家鮎美はこゝに至つてその珠玉の本質を顯し、作家として類稀な存在をはつきり主張してゐる。成程淡々たる姿である。誰にでも見易い單彩さである。然も諸君は諸君自らの感受性を誇るためには、これらの句の底深く湧き上る朗然たる響を聴かなければならない。そして諸君の感受性が無限の陰翳を藏するならばそこに漾ふ無限の陰翳をも見逃しはしないであらう。その色はいぶされ、光

か底に秘めて、一句々々にんげんの眞實を語る。まこと鮎美君は餘りに自分自身の心を語つてくれるために、それは氣づかずに通りすぎる危険をさへ感ずる程だ。

最後に鮎美君の實生活の一端は

このころ

父とゐてさびしく宵の白湯を呑みの時代から

結婚後日小感

うれしさのまぜば眼鏡のいる母よ

こなり

幸福の欠伸となつて仕舞ひけり

難解史句の解

本誌新春特輯號所掲難解史句に付き本日まで私宛に送られたる注意及び解釋を寄せます(三面子)

(1)四六頁第一句盜賊の住み家、第二句白浪の行衛、第五句御捌きもの解は本誌第七卷昭和五年七月號〇四七頁第一六句萬葉もの解は同四月號五月號にあり

蛭子省二氏報

(2)四七頁第二句流れ行く歌、四八頁第六句寄るべき御身の二句へ、昌泰四、改元延喜元(西九〇一)年正月廿五日左選の可命降り、菅公が太宰權帥た

の近頃である、そして好んで『善人』を諷ひ、椿を歌ふ鮎美君である。

以上私は鮎美君を徹頭徹尾詮表した。もこより之は眉の一面である。作家鮎美は我々の誠實な期待すべく今日の未完成である。従つて多分の不満さ、これからの精進を持たねばならぬことは否めない。然も鮎美君が自分のものなら鼻翼を褒められても喜ぶ底の人間でないこと、弱點に觸れられて微笑を返す人であることを思はぬ私ではないが、君の聰明は屋上屋を架する贅言を必要としないであらう。私は假令私の錯覺を嗤はれやうとも、日頃の宿望を果した喜びを感ずる。

三面子

るに至りし際、宇多法皇へ詠進せる一流れ行くわれは藻屑となりぬこも君しがらみとなりてさめよ」この歌詞より出でしもの〇四六頁第八句夫婦別あるは、四八頁去りにくい譯はの二句、同年二月二日菅公が自邸を發し一路筑紫への首途に、公が「東風吹かば……」の詠に對し「梅は飛び櫻は……」の返哥ありし事、手習鑑の榮種御供かに出で居り(三面子曰く此解少し不安)〇四七頁第一六句萬葉もの句は菅公の書齋を紅梅殿と稱するより出で句構は〇四七頁第九句違勅の譽れ鶯さ八重櫻

の櫻は、梅の誤寫にてはなきか(三面子曰く出所記への原稿紛失、急に調べ難し)〇四八頁第五句時雨れけんの句奥州笠島は藤原實方の適所、笠島の道祖神たる駒形神社は實方の娘を祀る由此句に付き更に検討ありたし(三面子曰く、四七頁第六句直ぐな大爾波がの次に、曲水の宴さすれば詩の筈さあるも右第六句に對する感想を書き添えたのが間違つて恰も句のやうに掲載せられたり、此に付き好古氏より、曲水宴は歌を詠むやう思ふことの御意見あり百科大辭典所載の説明に據れば歌よりも詩が多いやうにも思はる)

藤里好古氏報



進作標榜

ひろし

選

選後寸評

▽麗亟氏——氏の句はいま動いて居る。どう進んで行くか、注目すべきものがある。

「許した人に」「竹藪が鳴る」共に簡勁であるが、單調をまねがれぬ。息つまる、迫力がな
い。示された句全部何ものかを語らうとし
て居るが、未完成の憾を免がれぬ。

▽卯三氏——氏の句の稚拙さに魅力がある。「二十七」「みじめな姿」共に自嘲的で、然も淋しい人間の姿をまざ／＼みせて居る。

▽銀花氏——示された句の「内病」の句には凡想が多い。常病床にあるのであまり直面されてるため想を練る餘裕がないのであらう。「貴名箱」は平凡。「波にゆれ」はよく船世帯の氣分が出て居る。

▽鯉又氏——鬚首についての句を多くみせられたが、想像的で實感味が乏しい。ほんとはクビになったものほもつと深刻である。「輪になつて」は古句に及ばず。「衛生のため」共に凡想。

▽方眠氏——先輩である氏が、いつも句を見
せて下さる事は嬉しい。「金の世の中」は原
句「金」がもの云ふであつたが、それでは凡に
すぎるので、簡潔にして迫力をつけたつも

許した人に頼杖なごおよし
竹藪が鳴るまた冬が來た
二十七たかが下女ぐらいに惚れて
みじめな姿で一錢落ちて居る
貴名箱を掛けるくらしでないのなり
波にゆれく船世帯の夢
輪になりて百圓札を見る家族
衛生のための郊外建てつまり
金の世の中へ無一物
父の聲今日は仕事を見つけて來
氣に入つた腫火鉢の前にゐる
活けた菊今の吐息を知つてゐる
ボマードの匂にむせる春の宵
暴力がせめてもの言ふ世の中だ
合理化に又一人減り二人減り
客去つてしるゝ午後を寢てしま

同	鶴ノ莊	同	大阪	同	大津	同	姫島	同	大阪	同	養ヶ池	同	大阪	同	島根
同	普	同	大	同	量	同	方	同	鯉	同	銀	同	卯	同	麗
天		呼		子		眠		友		花		三		閑	



見えずいた嘘視線がそれてゐる
さつこぬいだモデルへ春がかすんでる
居残り思ひに唄ひ出し
末の子も學校へ行く年になり
はきくとして奥様ににらまれる
温和しくねんねく風中
死んでからあゝのこのさ手當法
下積みを踏付ける様霞降り
繼母にかゝらぬ子らは果報者
もう兄の寝ついた息へ徹夜の氣
慰めて居ながら共に寢て終い
儲かつた夢で笑はす朝の膳
ひみ冬を素足で過す書生下駄
こんなのが情夫か丹前かけられる
ストーブでポケツの銅貨あつくなり
表札の文字に見される門構へ
久し振り合へばスキ焼するさ云ふ
落泊の身に三味線の音も沈み
雨に暮れ寂しく村の灯が烟り
交又點小僧出すぎて叱られる
ぬる湯にお禮を云ふてもらい風呂
千金を夢みし小鳥の籠があり
努力せる副職に生きるのも皮肉

大	石	大	郡	大	吳	大	富	大	嵯	大	松	大	香	大	同	京	大	泉	大	島	大	同
阪	川	阪	山	阪	阪	山	山	阪	峨	阪	山	阪	川	阪	阪	都	阪	北	阪	根	阪	阪
鶴	白	素	右	紅	無	鳥	馬	靜	司	山	紫	詩	三	櫻	千	利	松	涼	明	夕	忠	人
峯	子	月	月	齊	莊	慧	香	郎	郎	月	石	郎	汀	園	春	郎	枝	哉	華	陽	二	生

りである。「父の聲」は平凡。

▽量子氏、大呼氏——共にはじめての出句である。今後の努力を祈る。

▽普天氏——「合理化」は資本家の挑戦に對し新興階級は階級的に目覺め振ひたゞればならぬ。そうした思想をもつて居ない。冷やかに事實を眺め川柳化して居るだけだ。「客去つて」は靜な句だ。

▽白花子氏——「さつとぬいだ」華かでエロチックな句だ。

▽紅氏——「はきく」は見付けどころがいゝ。利發そうな美しい小間使が目にうかぶ。▽紫石氏——「儲かつた夢」ユーモアのある句だ。「笑はす」は一考を要するところ。

▽三汀氏——各々異つたれらいどころをもつた句を見せされたが、みないま一息の精進が必要である。「こんなの」はそのうち一番平凡だつたがまとまつて居る。

▽舊臘十二月には私の勤め先の雑誌を三冊編輯して疲れて終ひ、一月には母の病氣見舞に歸國するなどで、ゆつくり句を拜見出来なかつたが、次號發表分にはもつと細評を加へてみるつもりである。

▽作家諸兄の御意見も承りたいと思ふ。沈滞した川柳界に一脈の生氣を加へる上からも諸兄の意見を充分きゝたいと思ふ。

(ひろし生)



關西 中堅作家は語る (其の二)

川柳を味ふ

太田 朝陽

記者 片桐 靈 壺

一月十七日の晝休を利用し難波驛にタクシーを飛ばし事業課に朝陽氏をお訪ねした、召じらるゝ儘に椅子を進める氏は謙讓其者の如く語り出された。

「私は川柳の落伍者で今更何を申し上ぐることも有りません。名前だけは川柳雜誌社前身の「みをつくし」時代から出してるましたが既に九星霜を経た今日まで熱も挙げ切れずそうか云つて冷え切つた譯でも無くズル／＼作句もし研究も續けて來ましたが現在では作句よりも句を

味ふ事が多くなりました。然し私にまつては川柳は一生の同伴であり今後共及ばずながらも作句も續けてゐると思つてゐます。私共の組織してゐる昭和全誠團川柳の會も四ヶ年を経ましたが百四五十の會員があり約選り六十人を同人とし路郎師を招じ毎月句會を開いてゐます。最近一般にも柳人が激増して來た事を聞きますが實に悦ばしいことです」

と此時クルリと椅子を廻轉して後のガーバーのポケットから新春號の川柳雜誌を引出し無造作に頁を繰つて社關係の人々の欄を示し

「此雜誌に最初から關係して居る人では綠雨(舊號「二柳子」)柳路、かほるの三君

があり今尙ほ中々御熱心の様ですが私も一時は五十句百句位の投句をし路部師の嚴選で四回も五回も全没にされ頑ん張り通した事も有り、七年前に亡くなつたが零骨ミヅ相棒がゐる盛んに發表句の數取争ひをしたこともありました。當時私は二聲云つてゐました。古い事は随分古いんですよ。が一體私は室内に閉籠つて作句するよりも吟行が大好きです。少くとも梅や紅葉時季には必ず實行してゐます。そうした處に所謂川柳の味が有る様にも思はれます。何分思想の古い私なごは最う新進氣鋭の方々では追従は難かしいのですから今後は趣味としての川柳に生きて行き度いと思つてゐます」

云はるゝ通り氏は川柳の他に謡曲聯珠將棋麻雀蒐集等々多趣味の人として有名である。御多忙の尊い時間を割いて愉快に面接せられしを謝し約三十分にしてお別れした。(十七日夜)



靈能の作家

關本雅幽

記者 竹内多聞

市電も鶴町まで乗ると大阪も廣いなと思ふ。道案内の書いてあるハガキをポケットから覗かせ乍ら辻を曲ると十二軒目が今お訪れする雅幽さんの宅であつた。僕の顔、僕より兄貴の方がモット多聞さんあなたによく似てゐますこいふ飛拍子なキツカケから

「私もズット前」みをつくし時代には苔穂、啞人、輝翠、古城山、二柳子さいつた人達と一緒にめしより好きで謄寫版を刷つたり、配つたり随分やりました、が一寸仲やすみの形になつたものゝ句は引つゞき作つてゐます、こんき私等の仲間で山月氏なご一緒に發展させやうと氣張つてゐますがな」ミて

一ト束の回覧誌や投句箋、封箋を出して來られる。「去年は本當に悪年で可愛いゝ兒なので無理から貰つた弟の子供を喪ひましてな、ホントに作句も何もない苦しい思ひを味はひ二曹目から瘦せました之れについて人いふものは切つ端つまるゝ不思議な現象があるもので、恰度二度目の盛り返りで子供を殺しましたが妙なものですな多聞さん最初のときは何でもかでも治さねばこいふ一念から私のこゝからこなくグン／＼力強いものが湧いて來てあれだけの重患を全快に漕ぎつけました、私しの力で治したこ信じ切つても彈らぬばかり、こころが二度目には何う力んでも先より以上に念じても、こちらが何かしら大きなものに押し倒されるやうな氣をくれがして、こゝ／＼取返しのつかぬこにして終ひましたが、此の試練から何ものか私に働らきかけてゐるこをハッキリ知らされて恐ろしく思つてゐます、そんな意味からか私は雅號のつけ方もその人の生涯に因縁があるやうに思はれてなりません。あんなここの酒井零君が短命でしたやうに

宿命でも申しますか、柳人を見渡してもその號から想像して大いその人ゝなりが餘り間違なく指されます。私しなごも父は生れるなりお前は案の木だこいつて來ました。つまり伸びる丈け摘まれて大きくなれないこいふ謂らしいが、そう考へるせいか事毎に伸びられない運命をもつてゐるやうに感じます。

そんな事から今まで作句しても壓さへられた者の苦しい呻きばかりでありましたが近來運命は如何こも仕方がないこして、くだらぬ不平は言ひ度くない、柳人の大部分が皮肉をこぼすこをもつて川柳を考へてゐるやうですが私は大の反對です、吾々のやうな下積みのものには止むを得ぬこは言ひ乍ら、川柳が上層階級の人達に迎へられない原因もそこらにあるこ思ひます。モット夫れ等の人融合して人生の本當の意義を全ふいたし度いこ思ひます。

私も川柳をやる前に俳句をやりましたが、今日柳人中で俳句から入つた人ゝ始めから川柳を皮肉、滑稽をこぼすものだと解して作り始めたものゝ二タ通りある

やうですが、何うも俳句から入つた人の句の方が私は好きで、何かしら深みがあるやうに思ひます、川柳雜誌の主張にもピッタリ来るやうにも考へられ割合に厭くこまなく先々こ精進して行く人が多い様に思ひますが如何でせう。

數年來の内に柳壇も次から次々新が變つて來ますが、ありや誰れしもある句作しつゝあるうちに行きづまりが来る、そのときにモート突きツキ破つて抜ける勇氣がないからではあるまいか、必ずや後に迄も残るやうな句を産む人は幾度もの難關を突き抜けて決して尻古垂れなかつた結果に相違ありません、お互にモット刺戟されて精進したいと存じます」話はつきぬがモーひるめしの句ひがして來たのでお辭儀をした。(寫眞カットは雅幽君)

大同團結へ

山川 紫明

記者 平 井 蒼 太

若し京都の柳人にタイプがあるものとしたら、その典型的な面影を紫明氏の温かな風貌に見出すことが出來やう。誠に春

陽のやうに暖かくもの靜かに、然かも一脈の熱を湛えた語調である。

「新興川柳」云はれてゐる句を、必然性のな、文字の遊戲に止まる川柳以外のものに見てゐる私は、やはり傳統の流れに悼さす川柳人です。

琵琶湖に舟遊せる紫明君



年來申してゐるこころですが、初心者の句には往々古句との符合やら、類句が多いと云ふ結果を來たし勝です。其時、只それらの句を全然没して闇へ葬るこころは、初心者生徒に迷はせ失望させるのみで、選者の責を果たしたとは云へますまい。何故何うしてそれらの句が没さ

されるか云ふ點を、選句の外に充分説明する親切が必要ではありますまいか。

「京都文藝」「串園子」「さいころ」から現在の「京」へ、川柳生活十五年の体験から見て、若い一部の人々の、朝に節を賣り夕に復歸へる云ふ無節操さが、群小柳社の亂立する難然として纏りのない京都柳壇の現状を招いてゐるのです。小我に固執して、自分が自分が先輩の下を風のやうに飛び出し廻つてゐて、何うして力強く社會に呼び掛けて行へることが出來ませう。何うして意義ある仕事が出て來るでせう。

以前から抱懷してゐる私の主張は、歴史の古い「京」の傘下に、現京都柳壇を打つて一丸したいと云ふ考へであります、それが實現出來ぬ望みであるとするならば、せめて各柳社各柳會を横に連ねる全京都川柳家を網羅する大同團結の結成に努力したい決心でおります。

川柳は四十男

片山 雲雀

記者 竹 内 多聞

此「番傘の新年號の「職業を通じて見る」

といふ特ダホに職業と川柳についてだいたが、生活即藝術でなければトンと熱も出ぬし、句に力がこもらぬではありますまいか。

「そうですね、そんなことも言ひます」が成程あんたはこの川柳雑誌の主張はホントに結構です、ところが私しや前から自分の職業(辯護士)川柳をゴツチャにしたくないんですね、一体から職業は神聖にして何ミか云ふものゝ自分の職業ちゆふものは誰れかて鼻もちのならぬくらひ下品なものですよ、それちゆうが職業には食はんがための金が付きものでせう、川柳家はマ―錢の音には縁の薄いものが多くそれでゐて好い句が出来るんですからナ、又私ら自分の職業の句を作つたかて、チツトモ興味がない、そやつてせめて句會なり作句してゐるミき丈けでも自分の職業から離れた氣持にしたり度い。私しや前から理屈が大嫌ひでんネ吾々の職業の仲間は大ていそんなんですが他から見るミ理屈ツボク見えるらしい、そうした點からでも飯の種ミ自分の趣味

ミは別人間になつて愉快になり度いんです。

此の間の番傘の記事でも大体から私やあんなことは嫌いなんです、まして辯護士なんて書くミでも水府君ミ大分謂ひ合つたミでした。

何ですつて川柳家には他の文藝に比べて所謂社會的にエライ人が少い、そのうちです、お互が寄つて見てもその通りで從來の川柳を下品なものとしてゐた先入主からの理由でもあらうし、相當な人が歌ミか俳句ミかには入るが川柳をやらないミいふミが柳界の發展しない證據でせう。此の點は大いに考ねばなりませんその意味からでも矢張り含蓄がないミイケませんな、作品に深みもなし直きに種切れミなつて作句をやめてしまふ。ミいつた具合で兎も角常識の發達した人でないミな、それで川柳家をニタ通りに見ますが、一方は相當な才量をもつて凡てを理解して句を作る人ミ今一人は何等ガクモンミいふミ少し強過ぎるがそうしたものを持たず川柳ミいふものゝ興味から句を通じて勉強する人もあります。後者

は人によるミ、他人の句をよく見る、目己の句を吟味する、こんな人は始めはゴクつまらぬ人でも何時の間にか一寸した軽い文が書ける、句も自由になまこめるやうになる事物を見るに可成り鋭く見抜くやうに、已ずミ修練されて立派な川柳家になる人もあります。

此れ等は川柳によつて目をあけて、つたものミいふやう、こんなのが本當の川柳家だ。かな常識を備へて生きて行く人になります。そんな事から見定められて就職したり、ある人の手元に引きまゐられたりした例もあつて、いはミ川柳のミりもつ縁ですかな。それから川柳をやるミ何ミなしに落付きが出来て、世の中が判つたやうな氣がするミ言ひますが、誰れでもいふミで、その證據には私共も以前は短歌をやつてゐましたが、その時分の歌ミきたら何がなし、戀のミミを詠まねば歌でないやうにいふてゐたんです、今日でも歌の方にはそんな意味のものが生命になつてゐて、糸のやうに涙を流して得々ミしてゐるやうですが、その點川柳ではさうです。お互でもさうでせう。

「惚れたハレた」のことは阿呆らしふてそんな句を作つて見やふもしない、モ一とつくの昔卒業してゐるんですな、こふ見るミ川柳は四十男の分別ものでいはゞ浮世を六分五リンに見てゐる年輩の追樂だらう、自ずミ人間に落付きも出来ませう、世の中が判つたやうな氣がするの

はあたりまではありませんか」

とボツボツ話は盡きないが潮ぎを見て根の生へたやうな尻を上げた、絹蒲團にくるまつてゐるやうな好い人なと思ひつゝ歩くと川口へんの夜は宵ながら寂しく自動車のヘッドライトが大きく大きく光茫を投げて走つてゐる。上海みたい

一生を句作に

中見 光路

記者 丸山 公二

訪れる者の微妙な不安とそして愉快さの感じを再び味ひながら、路郎主幹と交誼淺からぬ光路氏は南浜沿線粉濱に訪ふ。美しい奥様の案内で客間に通された。色々な世間話の後、話の切りを見て記者の

態度にかへる同音雅號の持主であるので限らない親みを覺えつゝ片頬に笑を浮べて徐ろに川柳を語られる氏に心から傾聴する。

「私は平素から川柳をやつてゐる以上は、是非共一句を残したい心がけてゐます。併し此の希望は私の生活さか境遇



に大きな喜び或は大きな悲しみのシヨツクを受

句を残さんが爲には、自己に鞭を打進して精進して行く覺悟です。私は若い人々と共に歩調を同じくしたいので作句なり共選の場合なごにも細心の注意を拂ひ且つ悩んでゐる様な譯で、本社から來る共選の原稿が恐ろしい物に感じられます」さて一般川柳家の持つなやみが氏にも

潜んでゐるらしく偽はらずに心のまゝを話される。

やがて運ばれた香りの高い茶に唇を濡らして語は、柳界に移る。氏は莫の灰を落して更につける。

「一体柳誌ミ柳誌が些細な事に拘泥してゐるのは非常に悲しむ可きものでまして論點の低い柳誌等を相手するには、餘り馬鹿馬鹿しく、それが例へば同じレベル位の柳誌であれば堂々ミ論陣を張つて闘かつたミて、柳壇に君臨する我が川柳雑誌の名に恥ないだらうと思ひますが、でない場合には抽象的な言辭を弄する雑誌があつても超然としてゐるたいものと思ひます」

湧き上る泉の如く次から次へと感想を述べられる。語るも熱なら聞くも熱靜かな部屋的主客ヘセコンドは徒に單調な音を刻んでゐた。辭するにあたり意義ある會合を記念せんと二人が膝を交へて別項の句を創り愛媛みき子様の可愛いさよならの聲を後に辭した。(寫眞は光路君)

粒々集

夜遊びの頭へひんやり春の雪
 雑沓の鳥居何度も潜る掬摸
 悪人も善人も樂屋火鉢なり
 叱つても矢張り言ふふ寒さ
 舊曆の確かさが言ふふ寒さ
 爪弾の頭が痒い雨模様
 其の早さ艇尾に國旗だけが見へ
 文化村蹴のポーズを寫される
 箬紙も達筆であるお元日
 顔に出ぬのでおつよいこめられる
 學校出月給の外の門構え
 社頭の雪

松山 前田 五健
 東京 富士野 鞍馬

粉雪の賽錢箱の中もつみ
 境内の白砂いつそ神々し
 羽ばたきをする鳥居の雪が落ち
 高麗狗の鼻へも雪は少しつみ
 朝詣り鈴をならす雪が落ち
 御影 長崎 柳 秀
 然しなご話しを戻す金儲け
 藥劑師盛りちがえした舌を打ち
 握られてる手に惜しい犬が吠え
 死ぬ方が孝行らしい子を育て
 奢られて居るのに女給よく話し
 婦人科の賀状奥様宛になり
 ジレットの刃それも正月からは新
 蒲團こち子供の足を叱りつけ

創作 獎勵 懸賞川柳

第二回募集の言葉

川柳の社會化運動を徹底させるため、本社は既に創作獎勵の名に於て弘く社會より、より其き作家のより、其き作品を募集したところ、が前號發表の如く多數の秀句佳吟を蒐め得たので更にその第二回を募集することにしました。奮つて應募せられんことを切望する。

課題「靴下」
 選者 麻生路郎氏

賞三等 貯蓄債券 (拾圓券) 一名
 賞二等 川柳雜誌 (壹年分) 二名
 賞三等 川柳雜誌 (壹年分) 三名
 佳作 若干名 記念品贈呈
 句數 二枚五句以内 (但一人にて幾枚投ずるも可)

用紙 「川柳雜誌」新春號より每號添附
 締切 昭和六年三月五日限
 發表 昭和六年四月號 (四月一日發行)

投稿所 大阪市住吉區杭全町六〇三
 川柳雜誌社內
 創作獎勵懸賞川柳係宛

和漢洋醫院

大阪市南區長堀橋一丁目

電話南四一八八番

醫學博士 長谷川成一

私宅 大阪市東區大手通一丁目

新年特輯號 八五頁 和漢洋醫院の廣告
 告中長谷川茂一とあるは、長谷川成一の誤に付左の通り訂正致します。



一路集

(募集句)

雨 橋本 緑 雨 選

塵捨てに出たのが雨を告げても
トタン屋根仰山そうな雨の音
夕立に軒端を女らしく借り
遭難の無事を語り合ふ雨の中
雨垂れを一つ一つ受る八手の葉
展望をさへぎる雨へ立つて見る
今日も又雨かミスポツくや
春雨の波紋へ緋鯉寄つて来る
相合羽さの子がうちの子供やら
結構な雨だが三日目はあかれ
辨當を持つて歸つた雨の晝
雨ふればふるで詩人は詩を作り
女房が無理に持たせた傘さなり
踏切で死跡思ふ雨の晩
雨風を嫌ふて居れぬ郵便夫
雨の日へがらんごしてる紹介所
湯豆腐に外は降るけな音になり
世にすねて只雨ばかり寝る居る
雨垂を手に打たせつゝ長屋の子

今 然 不 馬 紅 司 耕 千 明 双 白 不 吐 涼 洋 有 三 無 忠 二
雨 然 然 慧 郎 ス エ ノ 民 春 珠 車 柳 路 句 哉 々 爲 汀 人 二

親しさのいつそ嬉しい雨に更け
聞き直と見てもやつぱり雨の音
土砂降りを行く甲斐々々支度
雨當り片手にうけて走し出し
雨風が淋しさを増す留守居番
二三日は豫定くるはず雨になり
はるばるこ着いた名所に雨續く
土砂降へ今宵は出ないなと思ひ
雨ばかり氣にして出嫌又座り
あきらめ一人減り二人減り雨宿
春の雨ひさしに一羽ぬれ雀
土砂降りの中を目轉車矢の如し
雨模様コートを取りに引き返し
雨降りに女中は別な氣で唄ひ
愚僧にも一句うかべり春の雨
又しても違ふ靴の音雨の音
求職へ一雨毎に秋の風
宵の雨理想を思ひ續けてる
さつぱりさ晴れて雨傘持て餘し

桃 素 柳 吉 丸 雨 沐 白 英 憲 角 葉 普 龜 方 靈 青 落 丁
水 月 兒 祥 葉 町 天 夫 坊 坊 光 天 坊 眠 函 水 葉 路

續川柳家の戸籍調

◇ 係 山 雨 樓

(一) 姓名 (二) 雅號及別號 (三) 出生地 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 職業又は勤務先 (七) 好きな句 (八) 自信の句 (九) 川柳以外の趣味 (一〇) 配偶者及子供の有無 (一一) 嫌ひなものと (一二) 川柳に手を染めた年月

(No. 6) 井上 信子

(一) 井上信子 (二) 別にありません (三) 山口縣秋田 (四) 東京市外杉並町馬場五四七 (六) 無職 (七) 貧しさのあまりの果てに笑ひ合ひ、雉子郎。人心の暗きに明日は研の如し、半文錢 (八) ありません (九) 多い過ぎて困りますが特に讀書旅行 (一〇) 良人子供男三女二人 (一一) 空ッ風、上ッ調子 (一二) 大正八九年頃かと思ひます。

(No. 7) 西田 浪人街

(一) 西田政治 (二) 浪人街外に、艶笑、八重野潮路 (三) 神戸市 (四) 神戸市西柳原町二六 (五) 明治二十六年八月三十一日生 (六) 無し、但し失業者浮浪人に非らず、

濡れて行く女へ傘の言ひ盡り
五目にもあいて内湯へ旅の雨
人も樹もみな甦る夏の雨
隣から雨が降ります雨が降り
賣出しののほりへ雨は用捨なし
兵隊がまばたきもせぬ雨の中
教會の大鼓がほてんになった雨
呪はれて亦ほめられて雨は降り
土砂降に勤めの辛い事を知り
尺八を聞きに來たよな旅の雨
雨の晩もあきらめた二時を聞き
賣り聲の投げたくさ俄か雨
雨宿りするこももない雨に逢ひ
白靴の呆然として雨やごり
會へぬかなしさ雨だれの音
雨だれにその憂鬱が迫り来る
ズブ濡れて張り合ふ無い獨身者
俄雨ゴーンと撞いた句を思ふ
雨の日を儲かる事を考へて
土砂降へよく來たなごもてな
隣まで行くに妹の傘をさし
野外劇三段目から雨になり
雨宿り軒のラヂオへ氣が揃ひ
雨の宵歸れば火鉢子は圍み
同桂枝 同紫石 同新水 同多聞 同靈壺 同蛙鼓 同鳩の家 同山月 同卯三 同楊山 同珊樓 同將吉郎 同神經草 同金水 同湖山 同奈緒美 同泉流 同利生 同艸樂

鼠

食堂に無事な姿の鼠ゐる 村樂

戀文の雨に滲んで看くもよし
ホネムーン熱海は雨に成つて
もう仕度するには遅い雨が止み
雲に切れ間あつてもあきらめ雨
圓タクをねぎする間もない俄か雨
雨の降る中を走つてのみ行き
横切つたレールへ光る夜の雨
雨の降る最中の聲で戻つて來
犬の毛の汚なし雨をうろついて
傘の雫を切つて虹を見る
吹き降りへ出勤時間迫つてる
雨の日をさの玩具にもあいて
同吉絃堂

五 客

牧場の牝馬へ淋し過きる雨
三味線を弾きたくなつた春の雨
禁酒したその日しきく雨に
その中の一人が喋る雨宿り
お茶曳いた藝妓へ寒い雨が降り
同菊路 同吉絃堂

人

雨だ雨小説本を伏せていふ 新水
雨の日を素顔にしてもいゝ容姿 スエノ
腹掛の銅貨は寂し宵の雨 町二

酒 井 駒 人 選

留守番はひさしい鼠の事も云ひ 憲坊

地主七「咳一つきこえぬ中を天皇旗 劍
花坊(八)自分の句にば殆んき自慢なし。
たゞ好きだと思ふ最近の句では「戀すれ
ば及川道子にも似たり」「今日も又テニス
コート白い線」(九)探偵小説、草花園
藝。(一〇)妻三十二歳、長女十二歳、二
女七歳、長男四歳(一一)政治界(一二)大
毎の毎日柳壇で淺井五葉氏が選をしてる
た頃。凡そ今より十五年ほど前のこと。

(附) 須崎 豆 秋

(一)須崎清次(二)豆秋(三)香川縣坂出町
(四)天王寺區大道三内藤製作所(五)明治
廿六年九月八日(六)會社員(七)路郎先生
の「秋さらり銀の襖のもの思ひ」(八)無し(九)
んほがへりがして見たし(一〇)無し(一一)偽
散步、演劇(一二)有、子無し、(一三)偽
宗教家、毛虫、(一四)昭和三年晩夏の頃
萬よしにてさや豆でビールを呑み乍らポ
ツポツ句を作り出したのが初まりでした
そこで號も豆酒でしたが後程酒の字を秋
に直しました。毎年さや豆の出る時分に
なる三川柳を初めた其頃のことがなつか
しく思ひ出されます。

ほんごうのを病人聞きたがり
藥代を訊く病人を吐つこき
親の手をしきりに探す手衛臺
臨終へいつそ會はない許婚
新藥の試験されてるこも知らず

人

病なき何うであらう高利貸
路郎師吟(行末はごうあらうと火の如
し)を思はぬでも有りませんが拜金主義
の徹底せるを覺えます

地

退院の荷物を運ぶ笑ひ聲
句明るく情景躍如たるを悦ぶ

天

病妻を訪へば赤ン坊笑つて居
一讀いとしさを思ふも再讀涙をそる様
です若し夫れ一ト度び思ひを刀根山結核
療養所に於ける如き患者に走せんか人
生の悲慘轉々同情の念禁ずる能はざるべ
し時たま一家流感に侵され妻子三名
共に床中に吟呻すれば思ひは更に切なる
もの有り、青水氏の讀まれたる兄の行末
の幸福と夫君内助の功とな庶ふ者又病め
る妻女の平癒を祈らん

軸

柳 秀

流感に一ト息ついた街の醫者
いさゝかの羔にブルは醫者を呼び
病み續けはつこくやうに腹を立て
「病」にちなみて、ものせし古きなかり
好める句二ツ

やさしうに云ふ藥へかぶり振り
眼藥の日向をむけば涙ぐみ

選後の御斷り

1、甚だ御粗末な軸吟で恐縮致します
2、私は課題吟(病)の選をせよとの通知が
有りしました、願いますれば昭和貳年春以來
川柳雜誌の御世話になつて居りますが川
柳に手を染めてからの年月はまだまだごく淺
いその私がかゝる事を引き受けるのは誠に
分に過ぎた大それたことと思ひますが
川柳への強い愛着と路郎師初め同人社友
がたの御推擧や並に紙上既に發表せられ
たことなどを考へますれば今更御断りす
るもの何うかと思ふて御受けすることに
決めました、さていよいよ應募句を拜見
致しますと孰れも努力の結晶と存じます
が就中先輩のかたや柳界知名の人々
のものが澤山あるのに恐縮致しました何
うせ至らぬ私のことですから都合の點
も亦優秀なる玉吟の見落しなども多々あ
ることと思ひますが彼れもこれも一時の
事萬能の神様でない限りには心よく許し
て戴けること、信じて疑ひません
茲に皆さんの御健吟を祈りますと共に
熱心なる御努力により柳壇が年々を重ね
るに随ひ倍々隆盛となり健實なる而も一
大光輝ある發達を遂げ頼て大成の彼岸に
到達する日の近きを庶ひつゝ妄評と妄選
とを深謝致します

◇

一 徹 選

病人に今日の日にちを教へられ 有爲郎

▼登ヶ池支部新年會に四日誌友の鶴峯君、社
からは新水、雨町の兩君と私とが出席致しま
した。
▼梅田支部では鮎美君、ながらく幹事とし
て活躍されてゐました、今回川村親月君と
幹事を交替されることになりました、舊幹事
の勞を稿きらうと共に、新幹事の一層の努力
を祈ります。
▼本社同人社友會を一月十四日夜路郎先生
の宅で催しました。出席者十九名なかゝの
盛會でした。
▼道田葉平君は十二月十五日目出度結婚さ
れて歸阪されました。お喜び申しあげます。
▼八木善仙君は十二月廿五日女の子を儲け
られて喜んでおられます。
▼本田柳一路君は一月五日、長男金太郎さん
を舉げられて喜んでおられます。
▼山本丹路君(社友)の嚴父一月十二日永眠
されました哀悼の意を表します。
▼福田鶴峯君は一月十三日午後二時勤務中
負傷されて自宅で療養中です。一日も早く全
快を祈ります。
▼廣瀬無鬼君は勤務先の關西土地會社樓上
で十七日夜川柳會を催されたので社から琴
人、山雨樓の兩君が出席指導の任にあたら
れました。

▼本號の編輯は路郎先生、町二、亂耽、愚陀
杏三、公二、山雨樓の諸君と私とで本社事務
所で致しました。

轉

居

岡田三面子氏は東京市外戸塚町下戸塚四九三
(一) 〇三六九號(二) 〇三六九號(三) 〇三六九號
一丁目一五八(八) 〇三六九號(九) 〇三六九號
町東洋レーヨン會社寄宿舍へ

病む父を訪へばうなづくばか
熱が出たまゝで暮れ行く花曇り
病上り子供を醫者にするさきめ
來は來たが代診すまぬ顔で立ち
我まゝも託も出て病みつゞけ
はんさうの事を病人聞きたがり
病源を尋ねて醫者に笑はれる
病妻へ執の茶漬けを流し込む
試練こも思ふて病みの眼閉じ
鼻の先乾いた犬が尾を振つて
その資産病を重くしてしまひ
夢遠く夏を慕つて病んでゐる
母ちゃん御病氣いくつ寝て
病人があります醫者の車下り
徒然に手首の細り行くを見る
見舞客へ兩頬を撫でゝ見せ
病む胃を女醫徐ろに撫でゝ呉れ
酒癖を友は病にして呉れる
迷信ご知りつゝ灸も据へて居る
呪ふと忘れて生さぬ病みつゞき
病床の窓へ小鳥は鳴いて行き
臨終は何か云ひたい口を開き
胃病また斷食せよさゝめられ
寶藥で我慢さしきく風邪をひき
退院を先んじられて涙ぐみ
憧れて來た大阪で肺を病み
病院の匂ひに馴れて癒つて來
頑固でも年が風邪を引いて
慢性になつて注射になれてゐる

普天司郎 珊瑚樓 與一 草石 暢山 鯉友 鐵漿 木馬 雙車 白雨 明晴 水馬 艸樂 吉祥 木偶人 白帝子 紅龍 愚寵 奈緒美 菊路 沐天 今雨 明珠 桂枝 摩耶火 雲絃 裸人

たまに寝て見たいと云ふ見舞客
看病話が折れる咳になり
兒をあやす唄を聞く日の驗温器
子の熱へ叱りすぎたを詫びて
疲れたミ輕く云はれて病み續け
佳句
大病を心ならずも輕く云ふ
父親の病氣を吃りながら云ひ
病には勝てぬ夜中の咳にむせ
熱に浮きた生保のを妻に云ふ
退院の食ひたきものを言はせ
病人の寢息へ炭のはじる音
粉藥のすかせば今日も光るなり
いみじくも藥瓶今日プリズム
病人になり終ふせて淡路に居
五客
病む妻へ粥をしかけて朝を出る
病んだのが雀の糞の湯氣を見る
新藥の試験されてることも知らず
病む親を納豆賣子撮される
病む日ふも冷やさを知り猫の鼻
水藥衰しく喉が鳴りました
地
終へいつそ會はない許婚
天
藥代を訊く病人を叱つミき
軸
知つて居る痰はき散らす友ミき
一徹

新誌友 (六年一月十八日まで)
「川柳雜誌」前半分金壹圓八十錢以上拂
込の讀者を誌友として、ここに芳名を
掲載します。何卒此際新讀者に御勸誘
下されば御願ひ申します。御紹介下
される方には「川柳雜誌」の近刊を見本
として差上げますからお申込み下さい
今泉忠綱、内山開緑郎、新井白石、堀西一
郎、藤三碧、荒浪宏朗、安部元ひる、堀内平四
郎、小林雅紙、鈴木哲三、加藤星光、高木
熊代蛙川、村松夢櫻、片桐靈壺、橘豆佛
後藤清、栗丸、丸重光、小川清光、多田しげ
村山千草、土井周波、河野双車、向井一
田隆造、長崎義照、福田喜作、松本助雄、角
田のぶ、藤本雅爾、福田喜作、松本助雄、角
中かすま、西島水郎、中村幸七、勝山峯、中
五健、内田豆坊、和田源坊、森田耀一、前
西久太郎、福井進一郎、岡田純一、西原一
加藤潔、藏垣雄花坊、熊谷紅、森立名、鈴木
葉、關根五右衛門、太田隆彦、山本藤太郎、藤
川三代吉(本社事務所)

壹月號の正誤
こんなものもあるミ問屋のまがひも。路那
座蒲團があるも不思議な家に住み。同
時計臺は鐘の近づく學期末。亂耽
小春日に登つて比叡の雪に遇ひ。艸樂
酒の香が山吹色にせまるな
禁酒なきしたに引こもある酒に酔ひ。壹
コップ酒外に引こもある酒に酔ひ。同
緑之助氏選評。たゞ羨望の心解する勿
れ……云々は秀。小鳥には決つた餌が
貰はれる。の許。



春宵柳話

出口雨町

今春も私にまつては川柳家としての愉快なお正月が出来た。『新春の初笑ひはまづキートンから』といふのが松竹座の廣告であつたが私の初笑ひはさしづめ川柳からであつた。川柳を作る喜び並びに諸君等の力作を見せていたゞゞ喜びは言はずもがな、新年號一冊によつて歳末気分ミ松の内気分ミを同時に味はひ得るこいふナンセンス、そこからも亦私達の微笑が醗酵する。

十二月剃刀持つて怖わらせ 路耶
大晦日家主の頭撲りたし 無冠王
こつした殺伐たる気分が急大真下のに
山笠帽コロ／＼けてお元日 豆秋

こいふやうないこものんびりとした気分に変るのかと思ふに、人間の世界も實におかしなものである。

御近所を集め十六ミリの夜 佐保蘭
氣が變りねすみも猫も可愛しくて

○ 可村
天平の佛のまぶたちとみたら 閑生

新年號を手にしてこんな句を味讀してゐる間、しばらくは唯物史觀や階級闘争などいふ言葉も私の頭の中で眠つてゐて呉れるやうな氣持がする。ここにかはる君の『掛け茶屋の猫今月はみもちなり』の名句に接した時、私は何ぞはなしに漱石の『草枕』をも一度讀んでみたいやうな氣がした。この句はそれ程の魅力を持つて私に迫つた。しかしやがてそうした酔ひから醒めて現實に返るに、又『藝術の阿片性』こいふやうなこも考へさる。

○ 嫁ぐ前メイ牛山の本も讀み 柳路
この句から私はかほる君の舊作である羽仁もと子集も收めて荷が三荷

こいふのを思ひうかべたぢからの句にも時代の世相の一片がはつきり描出されてゐる。しかし句の素材が羽仁も子からメイ牛山に變つたこいふことは決して句の新しさを意味しはしない。柳路君の句は如何にも新時代の川柳ではあるが、その形式及び内容に於てはかほる君のそれミ少しも變つた點がない。川柳の舞臺が吉原からカフエーに移つたさて、それを以て新川柳だとは言へない。このこいは『番傘』の人達が堂々ミ犯してゐる處の大きな誤謬である。

○ 螢ヶ池文部の新半句會で某君からシユ

ル。リアリズムに就ての意見が出た時に私も一寸話しておいたが、一體に日本人には感じやうさはないで直ちに筋を知らうとする傾きがある。例へばタイトルは勿論のこゝ、辯士がなくても困るこゝふのが日本の一般映画ファンなのである。二三年前松竹座で『伯林交響楽』こゝふのを見たが、あゝした音響映画や最近のレビニュー又は音楽、舞踊のやうな高踏的な藝術はすべて『感じる』こゝふこゝが鑑賞の中心になつてゐるから、筋を楽しもうとする態度では到底見られない。

ほろ苦き戀とはなりしハツ手の葉

路 郎

先生のこの句を具體的に説明せよ。友人から言はれたこゝがあるが、詩は説明すべきものではないのだから、讀む人はそれを感得するまでの詩的精選乃至は努力を惜しんではならない。

俳句の方で、『構想の大』こゝふ點でよく例に出される句に芭蕉の『荒海や佐渡に横たふ天の川』こゝふのがある。が

私は翁の作としては甚だ不出來な句だと思ふ。こゝに『横たふ』こゝふやうな他動詞を使つてゐる點は確かに不心得だ。これは俳人の間でも問題にされてゐる。幸ひにも川柳の方では『構想の大』に於いても叙法に於いても『荒海や……』の句に負けないのが澤山にある。

水銀はのぼり黙殺されてゐる 路 郎

これはとても大きな句だと思ふ。そこに自然に人間の闘争及び人間と人間との闘争が暗示されてゐる。ストツプ、オーライのバスガールは上衣へにむ汗を忘れ、道路工夫の鶴嘴は決して能率を下げはしない。重役さんを前にして女事務員のペンを持つ手が機械であるこゝにも亦變りがない。まさに眞夏の酷熱と闘ひながら各細胞が前進又前進を動いてゐる夏の活社會を睥睨した一大バノラマのやうな句である。

『春宵柳話』にふさわしからぬ暑い話になつて來たので方向轉換——此頃小集句會を利用して『没句披瀝』こゝふのを

試みたいと思つてゐる。實際句主の勞に對しても、コソツト没にしては申し譯がないと思ふ。勿論優秀な選句機械に掛つた場合なら作者にしても首肯し得るけれども、二流三流の選者に扱はれた場合だつたらそうはいかぬ。何さか一應の理由を聞きたいのが人情である。そこで先づ私のやうな三流さうから所謂『没句披瀝』をやつてみたさうかと思ふのである。しかし川柳に限らず、選や批評は評者々々によつて一致しないこゝが多いのであるから、要するにむづかしい仕事である。かつて芥川龍之介の小説で『メンソラズイル』こゝふのを読んだが、それは作品の客觀的價值を決定する機械であつて、例へばモーバツサンの『女の一生』を掛けるに機械の針はまさしく百パーセントの數字を示した云ふやうなこゝが夢想體に書いてあつた。がそんな夢想は別しても、せめて佳句は佳句として誰が見ても首肯し得るやうな川柳理論の確立を私も理想する一人である。



火

華

素晴しい新狂句だ。(同)

×

「何が詩であり、何が詩でないかを論ずる位難かしいことはいない」とボーはいふ。何が詩であり何が詩でないかを論ずる前にこの人達には「詩とは何ぞや」を知らねばならぬ必要がある。(同)

×

「川柳も結局は人間」とは山本雨迷の(そして多くの作家達も亦一喝破する所。一見甘つたれた句には底知れぬ苦さを藏する一流類廢詩人の作品から作者の毅然とした健康な心を感得出来ないものに、川柳を語る資格はありはせぬ。實生活で間が抜けてゐて、川柳では一げし人生が歌へるなどいふ川柳家は、川柳家でもなんでもない。雨迷云ふところの川柳みたいなものを書く單なる馬鹿だ。(同)

×

不朽洞主人の三里に疾据えて川柳行脚に出すことだ。川柳の水平運動には最も効果的でありまた最も緊要事だ。勿論柳人はこれを支持しあらずる後援をなさればならぬ。爲すは義務であり受くるは權利である。一つ序で不朽洞主人に漫文を書せよ彼の漫文は柳界の權

威であり立派な川柳詩である。十七字の天地うごめくのみが川柳家ではあるまい。(むの字)

×

骨董を愛殖しメキに長ずることは趣味であり道楽である。殊に其古物が深く研究する價值を多分に持つて居ないならば古切手や古錢を蒐集する價值だにないものだ。單に古物の鑑定家なればタツタ一人あれば充分な答だ。本職であらうと餘技であらうと問題でない。好漢杏三君よ、オダテに乗るな、偉大なる作家となれ、斷じて骨董屋の番頭となる勿れ。(同)

×

久真岐翁三味線草特別募集吟「平和」の選後言に五客三才の廢止を主張し、且つ實行してゐると云ふ。だが課題吟を認容し個人選を引受けた以上、選句への共鳴度を表示する親切さを否定する理由引つ張り出す前に、翁萬句合を引つ張り出す前に、溫故知新の叡智を垂れ給へ。(S)

×

冬眠から再起したと稱される日車、「水原」新年號に「圓卓の一點」よりを草す。「川柳雜誌」の句のことにも二、三行費して「此等の句はたゞ時代の皮を被

つてゐるのに過ぎないのでありまして、皮一枚剥ぎとれば、その内容は至極く他愛のないものであります云々」と片付けてゐるが「川柳雜誌」をほんどに見てゐられるのか、眼が霞んでゐるのではありませんか。失禮だがお手元拜見して見ると元日秒をたがへず来たるはがき来たるみな賀狀也正直なところ、皮も肉もないやうで、白い骨ばかりぢやありませんか。(H)

×

蹄二、三味線草新年號に、新聞人として「川柳戦線の散兵よ、先づ「先生」をなくせよ」と云ふだが、先生と呼ぶことを廢することによつて川柳家の度胸が大きくなるとか、大人物が出来るとか云ふ筆法は、近頃ちと心得ぬわね。先生と稱するのは川柳作家としては勿論、よりよき指導者としてその人格その功績に對しての敬稱である。敬稱を用ゆるは禮儀である。禮儀はわきまえぬところこそ、道は亂れもする。昨日や今日川柳を始めたものが「水府君」「五葉君」と云うたしたら、それは度胸が大きいと云へやうか。そんな薄つべらな散兵で柳壇が前進すると云へますか。(一)

番傘と川柳人及び水原の代表的作家の句を見て思ふことだが、文字の遊戲は却つて後二者に多い。あの程度の技巧、あの程度の表現なら、何も創作に苦しむがことはなささうだ。殊に「たむし」新年號の半文錢の句は

×

光耀抄 葭乃選

松山 武

子

燿賣の聲和らけて金をうけ

更生の氣もちへ受ける年賀狀

雨にぬれ心もぬれて居るさ知り

喜びをゆられてこつぐ三等車

むつこ^{こしらへ}も居られず初忍びす

賣り上げの一つ一つに頭下け

縫針のはそさを思ふ寒稽古

大阪 壽枝女

十二月雀は軒に音をさせ

忘年會忘年會さ忙しい

伊勢にて

見覺への道連れ後や先になり

大阪 スエノ

満洲の野にさまよふて不幸者

大阪 みさこ^{（十才）}

年の市向うを見てもかざり花

元旦や切るにきらね難煮餅

かるた取りおはこ^{こしらへ}取らて聲を上げ

水道のあふれる音で目をさまし

岐阜 誼子

すねたでもないが炬燵でお正月

結婚か就職か岐路に立つ女

縁遠さ神は何をか與へてる

大阪 不路子

正月の活動人を見るばかり

おさうこに我が戀心見すかれ

父の目が光る男の手の手紙

初戀の人に許して悔いもせず

大阪 房子

ちよと^{ちよと}待つて、御飯焦けて來る

陸奥の友が情けの林檎箱

かたみきて姉が呉れる名古屋帶

プロペラが空に響いて佳い旗日

アリンスミ云えて笑はす帶の高

ウインドへ尖端ミ云ふ春の柄

メンソレを子供人形の傷へ付け

大阪 敏子

お歳暮の砂糖轉々春になり

正月の晴着レンズへ嬉しい眼

神戸 茂もよ

筆無精許したまへよ國の母

病床吟^{（二句）}

人前に出す手先さへはすかしく

今日も亦熱が出かゝり西日さす

各地柳壇

一のちのるを創れ



本社新春句會

一月 六日

於日本橋俱樂部

多幸なるべき幸未柳壇のトップを切つて、本社新春句會は開催せられた。當日心なしの雨は少なからず柳人の出足をにぶらせたけれども、多数の出席者を得て盛會を極めたことは感謝に堪えない。席上路郎主幹は「ああ川柳」と題し味はひ深い講演と共に、年頭の所懐として、本年は隠忍自重更に研鑽を重ねたき旨を披露せられた。不路子、機見女の二女性が勇敢に出席せられたことも錦上花を副ふるの感があつた。(山雨樓記)

(參會者) 路郎先生、六齋、四五磨、綠雨、公二、沐天、樹光、柳笑、山雨樓、露靈、青芽、無鬼、素月、菊村、清光、勝二、武藏坊、櫻果、禪人、悟郎、三碧、琴人、多聞、閑路、柳次、雨聲、不路子

機見女、翠峯、雞浮仙、進一郎、夢裡、いわな、吉一、豆秋、沒食子、龍生、喜一、金太樓、かほる、八步、白柳子、とも坊、竹水、哲郎、魚郎、華水、英郎、波汁、繁坊、鶴峰、敏一、杏三、椿雨、里十九、卯三、柳甫、毒仙、源坊、多郎、紋太、柳影、櫻天、石皮、野人、久郎、新水、紳樂、二期、愚陀、さだな、木醉、萬よし、涼哉

兼題 初夢 路郎 選

番頭は芽出度い夢にして話し 源坊
初夢のさめてそこの寒いこと 里十九
初夢が浮かばぬ顔で起きて来る 綠雨
初夢を氣にしているのへ銀の猪口 萬よし
初夢にお酒の爛をした女房 四五磨
初夢は何の苦勞もない姿 柳笑
初夢がとうとうさめて不孝者 青芽
餅を焼く臭ひが夢に流れ来る 柳影
初夢のつゞきを今年歩まんか 多郎

初夢に今年の運勢考える
初夢を語るが嘘の吐き初め
初夢は未だ母さんになつてあす
初夢を考へ渡る 戒橋
あんなに夢お寶で鼻をかみ
初夢へ彼女笑つてゐてくれず
初夢が宙に浮いてる午前二時
二つ三つ見た初夢のたよりなし
初夢は女給の中ですましてる
初夢を忘れる程に父は老る
初夢もなく起きた若さ也
初夢よ今年もやはりだます氣か
初夢のあまりに凄じき事ばかり
初夢にも雪はま白きものと見し
初夢の満洲の野はあたたかし
初夢に好きな女と飲んでゐる
初夢のそれから先は言はぬ處女
初夢をゆつくりと見る下戸の人
初夢に焚火とる 橋の下
僕にやる 初夢であり黙つて居
初夢を見るかや父に離れし子
初夢の出来で強氣へ廻つて見
初夢へ初夢持つて来る 二日
初夢に春のスタート切るも佳し
初夢を作つて話す歳になり
初夢のいつまた京に行けりや
初夢の通りに生きて見たいなり
初夢を話す約束して歸り
初夢の兄は上等兵になり
初夢の中に死なした子が交り
い、夢さ今年は樂もさせようよ

無柳子 龍生水 三碧 靈壺 樹光 杏三 柳次 勝二 豆秋 喜一 雨町 さら かなる 華水 石皮 機見女 椿雨 木醉 沐天 卯三 久郎 苦香 不路子 同 翠峰 同 金太樓

柳裸青白琴榕太路卯沐多同多山い卯同同紋同同毒同同裸同櫻同ス同
笑人芽子人浮仙雨選耶三天聞聞樓を三太仙人果エノ

獨り者鍋は炎にまかせたリ
かやく鍋蝦の赤きに味があり
子が二人手鍋 提げを嘆く妻
後添の氣強き 鍋は磨かれる
鑄掛屋の手に鍋の底みつめられ
すきやきに下宿の鍋を語り合ひ
鍋の底偉人を出したとも云はず
都會の夜に 鍋 墨の眉
犬にやる分を 残しておるす鍋
慈善鍋意見と 別に入れて行き
鍋口へ俺も眠たうなつて來た
鍋の飯食べで喧嘩もして居れず
鍋提げて今年四十の 獨り者
牛鍋をついた昔その昔
冷えてゐる猪口へすき鍋煮えつゝ
さああげ給へいらいが煮えてゐる
心安きにすき鍋なんぞ借りに出る
な婆の前に戀なご 嘩かん
新妻の嬉しきものにアルミ鍋
鍋一つ圍む兄弟順があり
(人)すき鍋へ向いて現に過去未來
(地)使はない鍋は届^ととこに伏せ
(天)大阪に知つた人なし 鍋の底
(軸)大家内鍋眞劍に煮えてゐる

席題 言ひ草 萬よ

言ひ草へ就職と云ふ氣を忘れ
小倅の言ひ草 頭撫でてやり
言ひ草がもとで宵寝の一人旅
言ひ草に徳利を倒し立つて行き
言ひ草へ遊びつかれた欠伸が出
失戀をして言ひ草が面白し

沐天 四磨 山雨樓 綠雨 源坊 毒仙 愚陀 公二 萬公 翠峯 六齊 櫻果 同十九 杏三 同路 白柳 紋路 柳太 選
 柳笑 竹町 素水 櫻月 哲郎

言ひ草が癪だと出前持負けず
おちつきを見ても言ひ草を聞き返し
終點でまだ言ひ草は片付かず
言ひ草にされて洪災がはされる
言ひ草へ母並ならぬ説を言ひ
言ひ草の伯父妻楊子耳にさし
言ひ草も聞くが君も飲める口
言ひ草がピンとこたへた御察はん
言ひ草が楊善へ消えはつとする
言ひ草がピンと来る程世帯染み
言ひ草はごんあうとも妻の役
言ひ草のあとから鶴は叱らるる
言ひ草を氣にして下駄にけつまづ
言ひ草に重役横を向いたきり
言ひ草を聞かず密柑を投げ遊び
言ひ草は昔のことを並べたて
弱い身があつて言ひ草成り立たず
言ひ草の三百六十五日かな
言ひ草の念所へを荒だてる
うつむいた儘で言ひ草聞き終り
言ひ草と別に女房は膳を出し
言ひ草がすきで戀人同志なり
言ひ草を開けば連れ子は甲斐性
言ひ草はいつもそつちで惚れた事
言ひ草に後をなれられぬ行く
言ひ草が後家の涙となりけり
佳言言ひ草に時計の針は遅々と
（同）表書き言ひ草あまつ
（同）言ひ草のしほ火箸をギユツ挿し
（同）言ひ草を聞き馴れぬに馴れ
（同）顔の割りに言ひ草ふるつて

源 機 石 籠 英 沐 翠 進 六 悟 多 開 杏 麗 沒 豆 同 華 同 毒 同 絲 同 武 進 木 勝 不
見 皮 三 生 天 峰 齊 耶 聞 路 三 壺 裡 秋 だ な 水 仙 雨 坊 郎 醉 二 路 子

抽斗をすつかりぬいて叱られる
抽斗をきめられてゐるお酒呑み
抽斗に二錢切手を入れ忘れ
抽斗を抜いてままと臺にする
抽斗の數と二十の戀のかす
抽斗に女文字あり春の風
抽斗へ空想をする社長室
藥屋の引出し數を讀み切れず
抽斗を無暗に開けて叱られる
抽斗の紙に包んだものがあり
抽斗を開けるに女座らされ
抽斗は粉白粉に染つてゐ
せげせく程抽斗の多いこと
又開けたが同じ抽斗の中
抽斗をやうやく抜いて見付からず
つれ／＼に抜く抽斗に笛が鳴り
抽斗の藥効能書が無し
來てゐる坊や抽斗みんな抜き
綿入のある抽斗をぐつと開け
抽斗に用事うたた寝起きる頃
（人）長襦袢抽斗三つほどぬき
（地）抽斗のこつちは男物ばかり
（天）よくよくの事抽斗へ亭主立ち
席題 教會 會 互 五

素竹青源沐羅
月水芽坊人天浮
仙

逢曳によい教會と教へられ
教會へ華美な姿の未亡人
教會でみな罪の子にされてゐる
教會へ來て教會の一階級
教會へ一人娘の通ひなれ
改心をする氣教會たよつて來
三味線がもれて教會困るなり
小心に教會だけと守つてゐる
ルンペンへ教會の灯の明るすぎ
信じられぬ氣もあり婦人席を見る
教會の鐘窓越しにきゐてゐる
丸詰もゐる教會の和かさ
教會へ來ても個性を殺さず
天井の高さ教會しんとする
教會の朝麗かな陽が當り
教會に矢ッ張り福壽草があり
打水をして教會の静かなり
夕焼の空へ教會鐘をつき
居眠つて居眠つて教會を出る
キジルシにされて教會欠かさない
教會へなやみを捨てて行く女
清らかな朝教會の鐘になる
教會がとんがらがつて月へ立ち
教會はボブラに寒く灯つてゐ
教會は皆善人と云ふ姿
救はれに來た教會が恐しく
煙草喫ひ切る教會の門
川柳 天王寺支部新春句會
雜誌社 一月四日於内藤製作所 丸山公二報
雨の夜ではあつたが同人の外新水、綠雨兩氏

學人氏が奥様と伊勢參宮の歸途をわざ／＼
來會される等賑々しく開催することが出來
た。兼題披露の後でささやかな祝盃をあげた
兼題 挨拶 緑 雨 選
挨拶もそこ／＼にして汽車に乗り
挨拶を後廻しに子を抱きぬ
挨拶に儲からぬ話聞きあきる
挨拶の酔ふてゐるのも松の内
挨拶の一人／＼にうつむいて
（佳）たすき外しなぞ挨拶嬉しそ
（佳）挨拶の裡に個性を見められる
（佳）奥様と云ふ挨拶の長いこと
兼題 榮 琴 人 選
流行にうま／＼あつて榮えたり
策士家が動いて電車道がつき
光榮のその日フロック借りて行き
榮へてる店を保險屋見逃がさず
榮へに榮へて親父が臥てる絹布圍
（人）もう一つ支店を出す又當り
（地）弟の方も勅任官になり
（天）半分は運と云はれる榮へ方
席題 新年雜詠 互 選
しめ縄のうまやで馬子は何か云ひ
行あたりばつたり呑だお正月
三ヶ月時刻はづれの飯を食ひ
一歩出て春の姿に見すばらし
酔さめのまだたのもしい松飾り
のんびりと正月するに里はよし
同 新水 同 緑雨 同 裸人 同 公二 同 秋 同 豆 同 三 同 洋 同 鶴 同 峰 同 琴 同 人 同 選

川柳 御旅支部新年句會

阪大

兼題 寫眞 路 耶選

其寫眞キツ與へし日もありね
金はなく今夜は寫眞見てるのみ
母の亡き後はアルバムかくされる
(人)もう寫眞撮るさへ嫌な嫁さ後
(地)寫眞さへ差別待遇つけてかけ
(天)魂のこもつた寫眞抱いてゐる

兼題 ソファ 路 耶選

お目見得の女中ソファに待たさ
サービスの女給ソファに割込みぬ
ソファのみが知つてゐる機密費
ソファから振袖のこぼれ春の夜や
ソファに代表いつかな掛けぬなり
反抗もあつてソファに深くかけ
ソファに話しかけ 桁が違ひすぎ
(人)ソファに掛けようなくびになり
(地)ソファにふと見るとプロ意識
(天)ソファにドツカと人を呑んで

兼題 硝子戸 路 耶選

硝子戸の落付ききない十二月
硝子戸の部屋が氣に入り借さ極め
硝子戸へうつる女は頭下げ
眼があげばと病室の硝子戸だ
(人)硝子戸も強いへだての垣と
(地)聞へぬか硝子戸あけて叱つて
(天)執着を残し硝子戸しめかれる

兼題 風 路 耶選

風の便りに彼女嫁したり

吹く風に身もまかせたい俺である
吹け() 風があの家に届くまで
風ふけば吹くとて母の小言なり
(秀)風ふけにされるのつばの男
(軸)どんな風が吹いたか親を連れ歩
(軸)寄り添ふ云はぬは風が吹く

兼題 惡友 路 耶選

惡友と思われまいと疎遠する
惡友はおごらすのみを考へる
惡友と言ふた日もあり妾の前
爪はちきすれど彼には別な腕
(秀)愛の巢も惡友何の遠慮なし
(軸)惡友を姉がさへさる寒さなり
(軸)嘘をつく役を引きさうけ友の家

吹く風に身もまかせたい俺である
吹け() 風があの家に届くまで
風ふけば吹くとて母の小言なり
(秀)風ふけにされるのつばの男
(軸)どんな風が吹いたか親を連れ歩
(軸)寄り添ふ云はぬは風が吹く

兼題 惡友 路 耶選

惡友と思われまいと疎遠する
惡友はおごらすのみを考へる
惡友と言ふた日もあり妾の前
爪はちきすれど彼には別な腕
(秀)愛の巢も惡友何の遠慮なし
(軸)惡友を姉がさへさる寒さなり
(軸)嘘をつく役を引きさうけ友の家

兼題 惡友 路 耶選

惡友と思われまいと疎遠する
惡友はおごらすのみを考へる
惡友と言ふた日もあり妾の前
爪はちきすれど彼には別な腕
(秀)愛の巢も惡友何の遠慮なし
(軸)惡友を姉がさへさる寒さなり
(軸)嘘をつく役を引きさうけ友の家

兼題 惡友 路 耶選

惡友と思われまいと疎遠する
惡友はおごらすのみを考へる
惡友と言ふた日もあり妾の前
爪はちきすれど彼には別な腕
(秀)愛の巢も惡友何の遠慮なし
(軸)惡友を姉がさへさる寒さなり
(軸)嘘をつく役を引きさうけ友の家

兼題 惡友 路 耶選

惡友と思われまいと疎遠する
惡友はおごらすのみを考へる
惡友と言ふた日もあり妾の前
爪はちきすれど彼には別な腕
(秀)愛の巢も惡友何の遠慮なし
(軸)惡友を姉がさへさる寒さなり
(軸)嘘をつく役を引きさうけ友の家

兼題 惡友 路 耶選

惡友と思われまいと疎遠する
惡友はおごらすのみを考へる
惡友と言ふた日もあり妾の前
爪はちきすれど彼には別な腕
(秀)愛の巢も惡友何の遠慮なし
(軸)惡友を姉がさへさる寒さなり
(軸)嘘をつく役を引きさうけ友の家

兼題 惡友 路 耶選

嬉しい返事の筆の輕るさよ
それからは一べん財布見てのこと
停年の首を洗つて待つてゐる
簡単な夫婦に世帯締つて來
疲れた影が足まとひとと思ひ
本當を見せぬ笑顔にある惱み
請取つた金へもう一度おじぎする

兼題 惡友 路 耶選

夕雲を眺めて年の瀬を思ひ
獨り着心齋橋の灯に疲れ
寝られぬ夜時計の止る音を聞き
美しう伸びるにつれてゐるんな眼
まゝ事がつづいて残る大根の葉
今飲んだ二合がまはるバスの揺れ

兼題 惡友 路 耶選

夕雲を眺めて年の瀬を思ひ
獨り着心齋橋の灯に疲れ
寝られぬ夜時計の止る音を聞き
美しう伸びるにつれてゐるんな眼
まゝ事がつづいて残る大根の葉
今飲んだ二合がまはるバスの揺れ

兼題 惡友 路 耶選

夕雲を眺めて年の瀬を思ひ
獨り着心齋橋の灯に疲れ
寝られぬ夜時計の止る音を聞き
美しう伸びるにつれてゐるんな眼
まゝ事がつづいて残る大根の葉
今飲んだ二合がまはるバスの揺れ

兼題 惡友 路 耶選

夕雲を眺めて年の瀬を思ひ
獨り着心齋橋の灯に疲れ
寝られぬ夜時計の止る音を聞き
美しう伸びるにつれてゐるんな眼
まゝ事がつづいて残る大根の葉
今飲んだ二合がまはるバスの揺れ

兼題 惡友 路 耶選

夕雲を眺めて年の瀬を思ひ
獨り着心齋橋の灯に疲れ
寝られぬ夜時計の止る音を聞き
美しう伸びるにつれてゐるんな眼
まゝ事がつづいて残る大根の葉
今飲んだ二合がまはるバスの揺れ

兼題 惡友 路 耶選

當り矢

里十九

雙葉子

新水

同

同

同

同

同

同

同

同

川柳 鶴町支部作句會 (大阪)

關本雅幽報

自動車

客を乗せ助手はつとかれそうに、
圓タタを停めて四五人煮え切らず
自動車の轢かれかけても千鳥足
トラツクに目出度い布團乗る居る
自動車の皮と共にゆれ
賛成の自動車を呼ぶ事になり

木馬 一龍 小柳子 山月 雅幽

風邪引き

風邪引かぬ子には生傷たえ間なし
風邪引きは子守の知つた事でなし
風邪引きで好きな説教も休むなり
風邪引きは酒でなほると飲仲間
風邪引いて全集物を整理する
想ひつめて案は風邪を引くなり
風邪引きの何か不平もあるらしく

山月 小柳子 木馬 一龍 雅幽

川柳 蟹ヶ池支部句會 (大阪)

一月四日

一流報

酒一ツ飲みぬ生活へお正月

こんな所へも人並お正月がやつて来たした。
で兎に角生きてゐることを喜ぼうと言ふの
で一月四日、本社縁雨、雨町氏をはじめ、
誌友鶴峰諸氏の御來援を仰ぎ新年句會を兼
れて川柳座談會を開きました。
會する者三十餘名、中途久し振りに新水氏も
御出席下されたが、多く御話も伺へず時間の
足らざるを惜しみ乍ら盛會裡に散會しまし
た。

兼題 宴會

雨選

二次會のことで宴會少し揉め
末席はデッカンシヨで酔ふてゐる
宴會で十八番を歌はさる
宴會でやたらに頭下げてゐる
子の顔へ折さだまらぬ千鳥足
宴會に追ひまくられて支配人
宴會を只つまらなく座つてゐ
宴會をじたい出来ない顔となり
宴會で賞められ過ぎた今日の聲
宴會のなじみか元でつかひ込み
寫真にも撮つてをきたいかくし藝
宴會へ大分ひらけた課長さん
宴會へ女房の顔が二度三度
宴會は月給順に歌はされ
宴會の土産をばいと放り出し
孟の順で宴會先づ始め
ハレレケは會費のことまで口走り
一藝を了へ孟の的になり
宴會へ自信の歌がある強身
宴會は豫定だけではものたらす
宴會の折をめぐける子供達
宴會に上戸はざかと腰をすへ
宴會へ下戸は逃げだす氣で座り
宴會で次の集ひなきめて去に
宴會へ飲めそうなのが並んで居
宴會へたばんやりと煙草すひ
宴會の品手へ上役借りられる
宴會の仙臺平はかしこまり
宴役が立つて宴會席みだれ
宴會で課長の博多聞きたがり

砂郎 石松月 峯月 白眠 照夫 愚龍 鬼子 喜代志 一流 虫聲 道久 都路 十柳 清風 一柳 春馬 助六 水馬 杜洋 杜洋 可都惠 美和子 かつ美 葉子 紅子 伊勢子 長二郎 同 長汀 房川

宴會の世話を上戸は引受ける
失業へ宴會の窓映つて來
宴會を出て月が出て又唄ひ
宴會の酒の味覺も春らしく
宴會席みんな揃つた下駄の數
宴會で始めて好きな人が出來
宴會で一つしかない藝を出し
宴會の一つ一つへかしこまり
宴會へ貴婦人とふみだらな目
宴會へちと氣まぬがバ着せ
宴會へ呑み飲めない妓と話し
宴會で折日くだ二次會がすみま
宴會へあとは野となれ山とな
宴會へ飲めぬ氣で場所を取り
宴會の明日にせまつて藝も

鶴峰 詩樓 句郎 銀花 同 義和子 可都惠 愚龍 康夫 奈緒美 長二郎 水馬 杜洋 照夫 新水

兼題 日記

雨選

結局は見せるつもり日記帳
遺書らしい事も日記につけてなき
新年の望み大きく日記買ひ
日記には尙更狭い施療院
病中の日記食事のことばかり
新妻の日記はうれしいことばかり
日記にはありのまゝ書く男の子
遭難の日記届いて又泣かせ
日記書く氣にもなれず病み續け
つみのない日記へ母の笑ふこと
日記にもかき打開けらる日記帳
(佳)細々と日記をつけて若く逝き
(佳)一日を日記につけて賢母ぶり
(佳)姉妹の仲で日記をかくし合ひ

一流 奈緒美 杜洋 光一 百万石 瀬夫 峯月 虹雨 大觀 伊勢子 かず子 白眠 石松月 峯月

(地)手袋を口で引張る物を持ち
(天)手袋へ集金一度引き返へし
(軸)手袋の工合に二三度空掴み

題電車

雙葉 水樹 五健

氣まづきは電車で去つた嫁と逢ひ
花電車子にせがまれて無駄な乗り
カーブする電車へ足の位置を替へ
學校前朝の電車をぶちあける
終電へ遅れて變な氣が起り
花電車常着で来たを悔ゆる事
釣革へ立つて法被に坐られる
(人)共稼ぎ朝の電車に差し向ひ
(地)終電車たりの女と思はれず
(天)電車から悠々として松葉杖
(軸)此の町を電車毎朝起すなり

題決心 水 樹選
決心が狂ふて梅の驛につき
決心を鈍らせて居る戀があり
決心の後 姑へ逆はす
決心なさせて女將の思ふ壺
決心へ子供背中て笑つて居
(人)動かせぬ心へ母の旅支度
(地)決心の眼に燈がにじみ
(天)決心の足がよろめく段梯子
(軸)決心の今夜に迫る時化となり

川柳雜誌社 新春大會 (石川)
小松支部
一月拾日 於福源樓 上野錦水報
一九三一年を卜するに足る 當支部の新春大
會は、出席人員拾六名を以て盛大に舉行され
ました。

兼題鳥居 北山人選
鳥居から村の祭の夜が更け
正月の鳥居をくぐる嚴しき
蛇使ひ鳥居の横に陣を取り
京へ出た小僧鳥居の施主となり
大鳥居 今満潮の嚴島
元日の鳥居に明けて夫婦岩
杉高く深く鳥居に露がたれ
初霞鳥居ぼんやり浮いてゐる
呑みさした煙草鳥居の前で捨て
(客)鳥居にも母念佛で参つて
(客)大鳥居くつき朝の柱に浮き
(客)うらぐ 鳥居をめぐる鳩の群
(客)大鳥居由緒も古く壊れかけ
(客)大鳥居金具の錆も神々し
(人)鳥居今酩酊のロケーション
(地)抱き来た子を鳥居から歩ませる
(天)お稻荷の鳥居を低ふ島田抜け

兼題晴 美ざり葉選
醉もよし晴れた空から散る花辨
約束の九時へハツき晴れる朝
珍らしい越路の晴れが續くなり
(客)外出の晴着に鏡小さ過ぎ
(客)天晴と敵も奪めてる能い度胸
(客)酔ひたりて 晴と父の顔
(客)がひがひが晴れて仲人日を急ぎ
(客)晴着きたまふで寝轉ぶのも男
(人)軍服を着けて天晴の二等卒
(地)晴れても行き按摩の子が答へ
(天)雑煮膳晴れやかな顔揃ふたり
席題 三ヶ日 兎月選

晴れ／＼として三ヶ日をくたがひ
午飯はぬきてあります三ヶ日
三ヶ日一人淋しく嫁き晩れ
仕事場も春めいてゐる三ヶ日
(佳)三ヶ日済めば働く年と知り
(佳)酔醒めの水正月は静かなり
(佳)病む母の笑顔を見た日三ヶ日
(佳)三ヶ日浮世の事を思ふまい
席題 坂の上 白山坊選
坂の上今一挺の籠が飛び
挽いてきた苦勞見下ろす坂の上
坂の上へ鐘が冷めたく鳴り響き
坂の上まだ 遠い鳥を吐き
(客)坂の上たゞ黙々と陽が沈み
(客)一足づゝ力んで下りる坂の上
(客)坂の上もう一汗の梶を上げ
(客)坂の上本氣で車押してやり
(客)坂の上轉がりさうに女来る
(人)コスターを踏みて見る坂の上
(地)水筒が空になつて居る坂の上
(天)坂の上不圖石塊を蹴つて見る
川柳雜誌社 忘年句會 (出雲)
小松支部
十二月十九日夜於尾添雷相居 伊藤綾之助報
兼題 切り張り 相選
切り張り一つへ風があり
切り張りへ嫁は不慣れな糊をつけ
切り張りの母しつかりと負ふて
(軸)切り張りの一つ寒い風が抜け
席題 十二月 緑之助選
やり繰りと別に酔ふて居る十二月 雷相

(住) 師走の街も更けしうつろな夜
麗 同

(佳) 生き度いが爲の十二月足袋
同 雷 相

(秀) 呑んで寝た夜の寝覚めに十二月
麗 同

(秀) 師走の雲が迷ふ空に木綿足袋
麗 同

席題 温 泉 紫 光 選

温泉の月夜何處かで三味の音
緑之助

温泉の朝すつきりと陽を拜み
雷 相

温泉の宿へ夫婦と書いた日が續き
同 麗 函

(秀) 温泉の朝連山の峯の雪
緑之助

(秀) 果敢きもの温泉で知りし戀
同 麗 函

(秀) 温泉の町の朝はさきりの朝
同 麗 函

席題 手付金 互 選

手付金ほろい借けの日に逢ひ
雷 相

巧言にウカと握りし手付金
緑之助

川柳 加古川支部句會 (兵庫)

拾二月二十日 水田 篤男 報

兼題 愛 人 美世 光

愛人が出来て此頃やつすこと
泰 山

愛人が出来て母親氣が利かず
篤 男

愛人へちと云ひ過ぎた日が暮れる
満 穂

愛人が出来て仕事一つふへ
光 穂

愛人をびつくりさせたひきかへる
同 麗 函

大げさしよげて愛人甘へる氣
同 麗 函

川柳 兼題 餅 雷 相 選

餅の生んだ悲劇もあつて年は開け
麗 函

朝焼となり餅搗く音もよし
麗 函

餅が好きですかと餅を出す氣なり
緑之助

餅撒きへ人間慾のあからさま
琴 朗

(客) 新しき喜びの中に餅を焼き
麗 同

(同) 餅を食へながら悲観したりし
鐵 漿

(同) 燈明の影まろやかに鏡餅
緑之助

(同) 下戸として餅の馳走も春の
紫 叻

(同) かき餅焼ける匂ひに逢ふて
同 麗 函

(人) お雞煮へふとある若さよ
鐵 漿

(地) 伯母はごちやうでも餅が煮え
紫 叻

(天) 餡餅の丸み喜び事が増え
同 麗 函

兼題 夢 緑之助 選

夢の國千切れの雲が行く
雷 相

叩かれる夢に大聲あげてゐる
夕 陽

惡夢から醒め氷割る音をき
麗 函

茶柱に夢の當つた文が来る
紫 叻

(人) 愛兒の夢に蒲團をかける
麗 函

(地) 或る戀は夢を碎いて狂つて
鐵 漿

(天) 惡夢から醒めた隣は三昧なり
雷 相

席題 コーヒー 琴 朗 選

コーヒはでもバクといふとこが
鐵 漿

麻雀にコーヒ冷えたまんまなり
緑之助

なやましきコーヒの湯氣も
紫 叻

(人) コーヒを命じバットを吸
緑之助

(地) コーヒの客を描き眉毛
同 麗 函

(天) コーヒは置きまの脇蒲團
紫 叻

席題 帯 麗 函 選

相談が決つて帯をぬめ直し
雷 相

密月細帯一つの日もあつて
緑之助

胸に帯結び姉妹の日和下駄
紫 叻

(天) 號外へ結べ了へない帯で出る
雷 相

去めつつもり途中下車から氣が變り
紫 叻

山の端に満月を見る途中下車
雷 相

途中下車惱ましく戀の消えゆく
麗 函

(人) 懊惱のさてあても途中下車
鐵 漿

(地) 途中下車水の都は灯がともり
緑之助

(天) 途中下車時計合せて驛を出る
同 麗 函

席題 大 根 紫 光 選

抜き跡の大根畑寒く見る
雷 相

大根が崩れ市場は灯がともり
紫 叻

大根の甘き味覺は衰へず
同 麗 函

(人) 大根の白きへ水は冷え切つて
雷 相

(地) 吊大根障子へうつる午後三時
琴 朗

(天) 鶏がある 大根畑の霜柱
緑之助

席題 齒 互 選

お早うといへば齒磨き睡をする
琴 朗

齒の抜けた子に愛らしい泣黒子
紫 叻

正直に生きてゐらしい齒の白き
鐵 漿

嘲笑の齒並を見せて横を向き
麗 函

欠けた齒の跡はつきりと梨を噛み
雷 相

言ひふせた夜の冷酒が齒にみ
同 麗 函

愛人の齒は豆ながらよう噛まず
同 麗 函

齒が抜けてさびしい母となりま
同 麗 函

川柳 兼題 復活記念句會 (石川縣)

小松 支 部 十二月十三日 於山屋 上野 錦水 報

久ぶりで本社客員安川久流美師出席され、今
後とも親しく御指導を賜はる事になりました。

兼題 絲 口 美 どり 葉 選

[illegible]

(秀) 座布團へひんなを寝ざ女の子
(同) 座布團をとなれば一目勝つてゐる
席題 木 枯 拵 錦
木枯に干大根がちつと搖れ
木枯の衣別ればならぬ戀
(秀) 木枯へ男の意地もなく坐り
(同) 戀を捨てゝ木枯を聞くつるる
(同) 木も枯れて盛りも過ぎた渡鳥島
(同) 木枯も吹き分けて居る町の端
(軸) 木枯の中に某店が閉めてある

二南居小集 (神
一月十日夕 日野華
題 締入するめ、神だのみ時
膝詰談判
何ぞないかと云へはするめ焼けても
酔ふてゐて催促の顔へすまぬなり
膝 詰 談 判 へ 八 燭 が つ く
時代劇すんでに傷をするところ
するめふと今日の目出度さ考へる
時 代 劇 大 統 領 の 出 る 所
残り火へ車夫のするめが焼ける
林檎むいてきて云ふ事が恐しい
締入が親を粗末にして丁い
行燈がつくと電氣もともるなり

十字路居小集 (一
一月二日 田 中 彩
題 凍 凍 凍 凍 凍
凍てゐる道上千屋までのもの
辻占はまだ賣切れず凍る町
ルンペンに凍つた朝を町へ出る

水報 代劇 春珠 明同 華同 二同 同同 同同 秋報 松雪堂 久流美 水選 思芥郎 松水 同同 松雪堂 東風 錦水 孤舟 弘

一月十日夕 日野華水報
題 綿入、するめ、神だのみ時代劇

勝語誤判

何ぞないかと云へはするめ焼いてくる

醉ふてゐて催促の顔へすまぬなり

勝詰判へ八燭かへく

時代劇すんでに傷なすゑとこゝろ
すゑめふと今日の日出変き考へる

時代割大統領の出る所

残り火へ車夫のするめが焼ける

林檎むいてきて云ふ事が恐しい

綿入が親を粗末にして、了ひ

行燈がつくと電気もともるなり

十字路居小集（一）

一月二日
田中彩

題凍る

凍てゝゐる道上かん屋までのもの

辻占はまだ賣切れず凍る町

ルンペンの凍つた朝を町へ出る

十字路居小集（大阪）

一月二日 田中彩秋報

凍る

ゝゐる道上か入屋までのもの

はまた實切れす凍る間

この邊へ才藝方同へ出る

凍るかち／＼彼はまだ來ぬ	悟 耶
題 初 夢	
初夢に憶氣を交せて話さんか	孤 舟
初夢に彼女は無事な顔である	靖 弘
題 熱 燭	
熱燭の少しは君もいける口	悟 耶
熱燭へ二階の人が禮に來る	靖 弘
熱燭に吐つたやうな舌つゝみ	久 郎
熱燭に恩人の顔ゆるむなり	孤 舟
熱燭の忘れたでない儲け口	同
雜 吟	
づぼらするなとハンマーが囁いた	靖 弘
梅咲いて不渡りの日が迫るなり	孤 舟
蕨灰へ丸い心になつて居る	同
二日孫が居らねば淋しがり	彩 秋
小夜曲 第三回小集（阪急線十三）	
川柳會	
十二月十日夜於たなべ喫茶店階上	
雜 詠	
遠 藤 燦 耶 報	
祈るすべさへ知らぬ痴はれ男	蒼 太
汝等へかくて邪淫の灯がともり	沐 天
さあ今日も偽を市場へ投げに行こ	同
血	
冷めたさは蝸蝸の如く血もあらず	蒼 太
やす値にて血を捧げるわれむ	燦 耶
諦めた賣女へまたも吸はれてる	沐 天

ともすれば高ぶる若い血を押へ 雨町

血の滴る肉へ獸の氣にもなる
同

はつしよん

素性はこのかの陥へ進にわする 燦 頁

諦めた賣女へまたも吸はれてる 沐天

ともすれば高ぶる若い血を押へ 雨町

血の滴る肉へ獸の氣にもなる
同

はつしよん

素性はこのかの陥へ進にわする 燦 頁

數回の合合はアマチユアながら、否アマチユアだけに頗る意氣軒昂なものがあつた、その事が又發展の基礎をなして居つた、遂に年末に至つて庄萬よし氏並に片桐靈壺氏を迎へて師走句會を開催するに至り、こゝに完全に支部への轉向の準備が出来た

兼題 女店員

靈壺

千舟

番茶屋の茶摘姿も女店員

白石

女店員裏長屋にはおしい顔

夢裡

愛嬌も御勤め丈けの女店員

三碧

(人)女店員今日もおんと着物で来

星光

(地)買ひやすく物やわらな女店員

田川

(天)女店員くはしくとはれ赤く

靈壺

(軸)女店員ケチな夫婦へ向を替へ

靈壺

兼題 ビルデング

靈壺

ブルデングに淡い印象残し去く

いわ

屋上の稻荷は何を感じすらん

三碧

飢餓線は彷徨つてゐるビル

白石

(人)盛衰の歴史を語るビルデング

夢裡

(地)貧乏の日常をへるビルデング

いわ

(天)掃除夫が真先をるビルデング

宏期

兼題 ストリア

靈壺

灼熱の戀にストリア燃えて居る

三碧

ストリアの名残を圍む夜警團

雅純

待つ驛のストリア客が世話をする

宏期

(人)ストリアへ女の席ぐに出来

宏期

(地)ストリアの語終にエロチック

いわ

(天)ストリアが不平のツバをあび

三碧

兼題 満腹

萬よし

満腹の子供はすぐになれてしまひ

星光

満腹と云ひつゝ箸を手離さず

千舟

満腹であれば不平も云はれない
(人)子を思ふ心も一杯きりで
(地)腹八分ではすまされぬ青年期
(天)皿の満腹を賣るレストラン

席題 鍵

萬よし

解決の鍵は彼奴が握つて居る

郊外の不安朝から鍵をかけ

鍵かける日の多いなり若夫婦

(人)出稼ぎのてんてん鍵を持つて行く

(地)鍵かいてあしたの事を考へる

(天)鍵ひびつて見せる淋しい夜

綠雨居偶會

一月八日晝

橋本綠雨報

浴場

口紅のお目出度らしい糠袋

貰ひ風呂順を待つてゐる村の

仕舞風呂ちと忙しい洗ひ方

相談、仲居

相談があると幹事は耳を借し

脂になつて亭主へ相談し

吸殻が並んで相談まともらず

一座も更けて仲居昔の物語り

一廻りついで仲居は喋りなり

隠し藝仲居の銚子攻め

柳煙吟社納會 (長野)

十二月六日

有為郎報

宿題 納豆

納豆うり寢床の聲で断はられ

腕まきさせた家賃やつぱり納まらず

眠れないうち納まらぬ意地と意地

宿題 炭

炭ばかり焚いてる寒い夜警團
大雪に炭焼小屋へ生きた顔
(佳)寄り遅い座敷へ炭火と居る
(佳)來客に七輪おこす音が洩れ
(佳)石炭の事も校長陳情し
(軸)晩酌の肴きまつた炭をつぎ

席題 辨當、提、行

畫めしの給仕へ用がもう溜り

辨當の重きに爭議氣が強い

妻の留守辨當仕出屋から届き

辨當箱も腕白へ小さすぎ

辨當のうまさ働きの甲斐を知り

辨當も妻へうれしく居る夜勤

盆提灯ゆら思ひ出話の夜

初鹽に二三羽提げて寫される

提げ切れぬ土産へプロの冷たい眼

行軍のつるべへみんな寄つてくる

行樂へ改札癪な鉄入

石竹、有三對座吟 (豊中)

一月八日

雑吟

有三居中村有三報

のつこりと出て帽子を脱ぐ

掌のかかきを懐しむ

白砂の俺も靜かに砂と居る

石綿の灰がよこれて梅が咲く

萬歳

萬歳師のオールバックをちっ見る

萬歳師馬鹿で通せる世の中

萬歳に笑ふ命のせんだくや

萬歳を真似て久しく子と笑ふ

魚釣

一匹の命をしかと握りたり

人を見てゐよか釣れずに歸る

同有三

塔史櫻

風柳子

白陽子

白陽子

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

柳郎

魚釣りの出来る限りは面白き
今日も釣る草もお前に氣の毒な

南海至誠川柳師走句會

(十二月八日夕例会場にて)

竹内多聞報

霜やけ

路内多聞報

霜やけ

霜やけの手は前掛の下に置き
特價品霜やけの手の多いこと
凍傷の手で御用きゝ頼まれる
立聞きは霜やけ足でかいてゐる
親しさは霜やけに見せる間病
霜やけの恐るゝに足袋をぬき
霜やけの春を語るもなつかしく
何よりも先づ霜焼の手をかばひ
霜やけに霞がたまる炭俵
蔵入りに霜やけの手を隠してゐ
霜やけの手に雨傘の重たすぎ
霜やけは掃除逃れの得もあり
末筆へ霜やけのこと書き添へる
霜やけの少女に一家さゝえられ
(人)霜やけを氣にしてゐては喰
(地)霜やけの手に冷やかな銀の盆
(天)霜やけの蜜柑を抱いた寝る
(軸)霜やけてそれから年々聞かれ

路南天竹涼山 路多無樹海青朝南多南竹夏格白朝游未
風汀郎石哉彦 郎聞人光耳石堂陽汀開汀石曉樓夕陽水成

同石竹

年の瀬を女中冷く突つてゐる
ラヂオまで父は止めてる年の
蜜柑船市場へ着いた年の
五割引夜露にぬれて年のの暮
年の市三尺程は道に出し暮
年の瀬戸の閉けたてもつくなり
年の瀬を病む枕元さわがしく
(人)年の暮パンクの手當殺氣だち
(地)ごたごた場の騒ぎに見ゆる餅
(天)朝風呂に行く人もあり大晦日
(軸)年の暮下駄で出ててもごか
欠勤のつづいて机借りられ
開合はせ欠勤までも尋ねられ
仕拂をみな欠勤で追ッ拂ひる
欠勤の價值宮武のホムラン
欠勤をのせて阪急、寶塚
見舞にも来ず出勤へ御挨拶
欠勤は女を連れ又かと酒に
欠勤の謂れば言はす女に
日曜の勝手が違ふ朝を寝る
欠勤の父へ清書を見せに
欠勤と三越で合ふ好い天
欠勤を母をつれてる高野山
欠勤をしてると見えて靴が
若白髪 若白髪生へて上席すゝめなり
若白髪あつて床屋と親しなり
若白髪案外金を溜めて居り
若白髪うしろ向いたで見直され
(客)あきらめてまに刈つた若白髪
(同)若白髪何でもやれる腕があり

多夏多鳥同山 同路朝同多夏瓢天一樹格籬海游 路格鳥一 同夏同樹同瓢朝無
聞曉開莊 彦 郎陽 聞曉山郎杉光樓下耳水 郎樓莊杉 曉 光 山陽人

同若白髪仲居が肩をもつてくれ
同若白髪福々しいと冷やかされ
同若白髪かしこい苦勞をもつて
(人)白髪かしのいなごいはれる
(地)艶々の中によじつた若白髪
(天)受付で教へてくれた若白髪
(軸)何故の白髪そ妻もまだ無い身
顔振れ 顔振れも揃ひコースもきまつて
顔振れの一人欠けたが淋しく
顔振れを見て安心と座り込みて
顔振れが顔振れですと支那料理
顔振れが悪く博士が隅にゐる
二次會へ顔振れコッソリや来る
顔振れが揃はぬに早酒になり
顔振れに揃はぬに早酒になり
顔振れに揃はぬに早酒になり
(客)顔振れを集めて廻る寄附
(同)顔振れにまだ顔ぶれがそろは
(同)顔振れに役不足と言ひ兼ね
(同)顔振れは期待といふなか
(地)顔振れは怖れて一人隅で呑
(天)本みやけ出た顔振れも中
(軸)顔振れが道一げいの戒橋
大 大佛もメートル法で測られ
大佛に有難きをも通り越し
大佛の目に人の世の早いこと
あを向いたまんま大佛とめぐり
大佛の立つ姿が眺めたい
大佛は智慧がなさそうに見え
大佛の歳をききたい掌のはこり

同籬同海夏鳥瓢 多路一路一夏路夏樹同格子同籬同路瓢樹海
下耳曉開莊 聞郎郎杉郎曉郎曉光樓下 郎郎光耳 郎郎郎郎郎



編輯の窓

路 郎 生

▼新春早々本社並びに小生宛に賀狀を頂きましたことを以て御禮申上げます。小生は暮の二十八日に賀狀の印刷が出来てはゐたのですが、俗務多端の爲め二日の書初めから数日間は賀狀の爲めに忙殺されました。中には住所が不明の爲め御答禮の出来なかつた方々もありました。悪からずお許し下さい。

▼新年號の發行に就て景氣の通信が續々と事務所からありましたので「川柳雜誌」の爲めに朗らかな春を迎えましたことを愛讀者並びに寄稿家の皆様にお知らせ致します。一層の御後援と御鞭撻を祈つて止みません。▼「月評」再掲を希望する旨の通信が頻りにありますので、本號から再び續稿を掲げるつもりでゐましたが、少しく趣をかへた

い爲めに社友同人會に諮つたりしてゐたので、本號の間に合はなかつた。次號から必ず約を果すことに致しますから期待してゐて下さい。

▼新年號に發表した特別讀物「關西中堅作家は語る」が豫想以上に好評だつたのでアンコールの形で本號にも續稿を掲げることに致しました。まだ「精銳」がつめかけてゐる關西柳壇ではありますが、いくらうまくても三枚目となつては聊か食べき、れる方てじくであらうと一先づ本號で打ち切り、他の精銳は他日機を見て御紹介することに致します。

▼本社の初旬會は六日の夜日本橋俱樂部で開催致しました(旬報参照)支部では釜ヶ池が四日に新年旬會の第一聲を擧げまし

た(小生差支え欠席)十日の夜の御旅支部、十二日夜の至誠川柳會、十五日の夜は御池橋支部の發會式へ顔出しを致しました。その他の支部へは他の同人社友諸君が出席されて仲々盛んであつたらしいです。

▼七日には「ふあうすと」社、九日には番傘社、等々他社の會からも案内状を頂きましたが、本社關係の日程以外は俗用方面の新年宴會其他で殆んど忙殺された形でした。

▼八日の午後森東魚氏から電話がありました。同氏に時間の御都合が付かなかつたのでお目にかゝれずに歸名されました。

▼社友同人會を舊冬心齋橋食堂で開くことになつてゐたのでありましたが、芹村の死によつて忽ち追悼旬會に變つてしまひ、その後その儘になつてゐたので一月十四日に社友同人會を不朽洞に於て開催しました。本社樓上での多數の會合は全く久しぶりだつたので近來稀な家族的な親しみのある集りでした。席

上各人から社に關するいろんな提案がありそれ等の名案についてはつとめて實行するやう打合せを致しました。續いて新年の小宴を催し十二分の歡を盡し十二時過ぎに散會いたしました。

出席者は琴人、綠雨、山雨樓、杏三、雨町、亂耽、愚陀、多聞、双葉子、櫻果、双車、村樂、蒼太、公二、光路、二南、靈壺の諸君と小生夫妻。參會する筈になつたゐた、ひろし、萬よし、の兩君はひろし君の母堂が重患の爲めに相携えて歸國されたので遂に顔を見せられなかつたのでした。▼一月二十三日の夜、番傘の主催で杉村蚊象君の追悼旬會がありました。自分は差支えて遺憾ながら出席出来ませんでした蚊象君の舊主と僕とは不思議な兄弟なので、一席追憶談もやらせて貰ひたかつたのでした。

▼十八日の編輯に、ひろし、琴人兩君が顔を見せなかつたので一寸淋しかったです。ひろし君は本職の方で忙がしかつたらしいが琴人君は風邪をひいて三十八度

二分の熱を出してゐたのだとは
あとで知れたことです。

追加

一月廿四日夜八宮神社で神戸支部主催の川柳祭が行はれ、萬よし君と小生が講演をやつた。餘興に時代劇赤城蔵二幕が演ぜられた。鳴物から照明から、衣装から背景まで頗るつき大懸りのもの、殊に立廻りの巧明さは二南君が剛道三段の腕前を遺憾なく發揮したので大向ふを唸ならせた「三拾錢では安いぜ」「大統領」だの「澤正の再来」だの類りに牛疊が這入る。かほる君の娘お花のエロチック、華水君の御室の勘助のふけ役、何れも本職はだし、ほんまの芝居のやうだんなアとごつかで聲がしてゐた。二幕を閉ちてコレで仕舞だすといふのに誰も座を立たないそこで、かほる君が、お花の舞臺姿のまゝで沖の大船をトさし舞うて覺をつけた。世の中は不景氣だといふのにいや若い人たちの元氣ッたらない。

社告

川柳雜誌社 基金募集

「川柳雜誌」が柳壇の力強い存在として創刊以來八星霜に亘り獨立自營、致々としてその標榜たる川柳の社會進出、質的向上量的發展の大旗を掲げつゝ力一ぱいに奮闘して來ましたことは諸君の風に御承知のことと存じます。これと申しますのも、わが社の主義出張に賛同され、直接間接多大なる御聲援と御助勢を頂きました皆様御愛護の賜と深く感謝してゐる次第であります。

今や多幸なるべき辛末柳壇を迎へ、つらく過去現在の實績を顧み、更に將來を深思しますと、本誌の使命の益々重大なる事を自覺する次第であります。しかしながら如何に絶大なる熱に燃えつゝあることは云ひましても物質上に恵まれることの薄い同人社友の意氣だけでは、到底充分なる躍進的效果を擧げることは容易ならぬことと存じます。さうしても川柳に熱を持たれ

「川柳雜誌」を愛して下さる諸君の御力添へを仰いで、時勢のテンポに副ふべく現在の狀態よりも、より以上に積極的な畫策の實現に努めなければならぬことを痛感す

るのであります。

就きましては去る一月十四日の社友同人會の席上充分の議を重ねました結果、左記規定に依りまして各々に淨財の御喜稱を願ふことと致しました。何卒本社の方々は勿論、大方の各位に於かれましては本計畫の爲め奮つて御申込あらんことを祈ります。

昭和六年一月

川柳雜誌社

規

○一口一圓以上とし幾口にても御申込願ひたく、一口以上であれば端數がついても結構です。この意味は全くの淨財の喜捨を仰ぎたいからです。

○御送金は大阪市住吉區杭全町六〇三、川柳雜誌社事務所内基金募集係宛になるべく振替（大阪七五〇五〇）が爲替でお願ひ致します。

○〆切期日は別段定めませぬがなるべく本年中に一先づ打切りたいと思ひます。

○御芳名は誌上に録し領收の證と致します。

○基金として拜受いたしました分を誌代に振替へ又は誌代を基金に振替へる等のことは御用捨願ひます。

○御喜捨は現在の社の經營費に充つるものではありません。將來への堅實さを保證せしむるためのものでありますから、その點御含み願ひます。

投稿規定

- ▼近作柳樺及課
題吟の句稿は
葉書又は同型
の厚紙に各題
別紙に認めて
住所氏名雅號
を明記するこ
と。
- ▼近作柳樺は一
部又は二部の
いづれかを明
記する事。
- ▼各地會報は半
紙判の原稿紙
に清記のこ。
- ▼文章は二十字
詰半紙判原稿
紙に認めるこ
と。
- ▼書體はなるべ
く楷書「川柳
雜誌原稿」を
封筒に朱記す
ること。
- ▼締切は嚴守さ
れたし。
- ▼投稿其他につ
き御問合はす
べて返信料封
入のこ。

募集

第八卷第四號課題

二月五日締切
(各題十句以内)

- ▼髮
前田 雀郎 選
太田 朝陽 選
出口 雨町 共選
安西 杏三 共選
- ▼指
現金

第八卷第五號課題

三月五日締切
(各題十句以内)

- ▼ス
場末 森 東 魚選
住田 亂耽 二選
朝田 新水 共選
- ▼船客
- ▼每號募集

▼近作柳樺(一部)十句以内

▼近作柳樺(二部)十五句以内
麻生 路郎 選
安井 ひろし 選

▼近作柳樺の一部と二部(同一人)で
投句することはお断りします

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句購讀
廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務
所宛に願ひます。

定價

一 部 金 參 拾 錢
牛箇年前金(特輯號共)壹圓六拾錢
壹箇年前金(特輯號共)壹圓六拾錢
(牛ヶ年分以上御送金の方に
は投句用箋を贈呈致します)

料告廣

本誌への廣告に就き
ましては本社へ直接
御一報下さいますれ
ば御相談に應じます

▼御送金は舊曆日座大阪七五〇五〇番へお拂込みにするのが一番確
實であります▼諸代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙
に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金
郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便
(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には
何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して
御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和六年 一月廿五日印刷
昭和六年 二月一日發行

第八卷第二號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪府西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸 二 郎

發行所 大阪府西成區千本通五丁目七番地 川柳雜誌社

大阪府住吉區杭全町六〇三番地 振替大阪七五〇五〇番
電話天下茶屋二五七九番
電話天王寺一一六七番

事務所 川柳雜誌社

賣場書店

(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
(東京仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、後藤、實文館(願館)
石塚(京都)三宅(松山)弘文舎

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全

清 酒

白 鶴 禮 讀

白鶴をチントンシャンミ提けて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁こはなりぬ君さ僕
白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀

